

日本洋学史 : 日本人と南蛮語学

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林

(巻 / Volume)

48

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

100

(発行年 / Year)

2001-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020987>

日本洋学史

——日本人と南蛮語学

宮 永 孝

日本人がもっとも深い交渉をもった外国語は、漢語（中国語）である。ついで十六世紀の半ばから約百年間、西ヨーロッパの言語（ポルトガル語、スペイン語）や古典ラテン語などとかかわりあいをもった結果、日本語のなかにもそれらの言葉が少なからず取り入れられた。

日本人の外国語学習の歴史とその受容についての研究は、近年わたしがいちばん関心を寄せているテーマである。外国語といえば、近隣の国々の言語——朝鮮語、ロシア語、中国語、タガログ語（ピリピーノ語）その他があるが、目下のわたしの興味の中心は、東洋系の言語の摂取について究めることではなく、日本人が印欧語族に属するヨーロッパ系の言語とどのように接触し、どのように学んだのか——いわば、日本人の西欧語学習の起源と沿革について研究することである。

わが国におけるヨーロッパ言語の研究は、まずポルトガル語、スペイン語、古典ラテン語などを学ぶことから始まり、イエズス会の布教活動時代にピークにたっし、禁教・鎖国時代をへて、幕末まで細々と命脈をたもつのであるが、ポルトガル人やスペイン人が追い払われた寛永の末（一六四〇年代ごろ）から下火となり、代わってオランダ語学の全盛時代が到来し、幕末をむかえる。いまヨーロッパからわが国に入ってきた西欧語を歴史的に概観し、大きく区分すると、およそつぎのようになる。

（第一期）ポルトガル語・スペイン語および……………十六世紀中ごろから約百年間。

古典ラテン語

(第二期) オランダ語……………十七世紀の初頭から幕末までの約二五〇年間。

(第三期) 英米語・フランス語・ドイツ語……………幕末・明治期から現代まで。

ロシア語・イタリア語およびその他の言語

*

本稿で取りあげるのは、おもに十六・七世紀のキリスト教の布教および禁教時代(天文↗寛永年間)から幕末あたりまでであり、日本人がはじめて西欧語にふれ、それらを学んだ経緯と学習の沿革、展開についてである。

日本人がヨーロッパの言語を学ぶにあたって、それを伝え、教えるものがいなくてはならないが、教師はキリスト教の宣教師、教わるものはその信徒であった。

日本人がはじめて耳で聞き、学んだ言語は、南欧系のポルトガル語と古典ラテン語であった。まずポルトガル語との接触と学習、その浸透と発展から述べてみたい。

日本人がポルトガル語をはじめて音声として聞いたのは、いまから約四五〇年まえの天文十年ごろに、ポルトガル人がはじめて鹿児島や府内(現・大分市)にやって来たときであろう。そのとき島民は、ポルトガル語を単に異国のことばぐらいに考えたにちがいはなく、ポルトガル国やポルトガル人だといっても皆目なんのこともか、見当もつかなかったはずである。

天文十三年(一五四四)ごろから、ポルトガル船が主として九州の諸港に來航し、ついで同十八年八月十五日(一五四九・七・二二)、スペイン生れのイエズス会の僧フランシスコ・ザビエルが中国のジャンクにのって鹿児島にやってくるのである。

ザビエルの來日をもって、わが国にはじめてキリスト教(旧教)が伝わるのだが、その來航に先だつ二年前——天文十六年(一五四七)の秋、郷里の薩摩を連れの者二名とともに脱出し、マラッカ(マレー半島の西岸)にむかった日本人がいた。かれらの日本名ははっきりしていないが、一人はアンジロー(またはヤジロー(弥次郎¹))ともいう、あとの二人は同人の兄弟と召使であった。

これら三名の日本人を連れて行ったのは、ポルトガル船の船長ジョルジ・アルヴァレスであった。⁽²⁾ アンジローは、当時三十五歳位であつたという。同人の氏や素性についてはわからぬ点が多いが、家からはけつして卑しくなく、資産に富んでいたらしい。

しかし、アンジローは若年より放らつたな生活を送つた。あるときじぶんの行なつてきたことを悔いあらため、一日、仏僧をたずね魂の救済をもとめた。が、僧はかれに心の安らぎをあたえることができなかつた。

折から薩摩に在泊していた、かねて知りあひのポルトガル人アルバロ・ヴァスに相談したとき、インド地方にフランシスコ・ザビエルという聖人がいることを教えられた。そのひとはかならずや汝の苦しみを救つてくれるにちがいないといった。

だがその後、アンジローは人と争ひ、相手を殺してしまい、寺院に逃れた。かれは郷里にいたたまれず、やむなくポルトガル船の船長ジョルジ・アルヴァレスにたのんで、連れとともに国外に連れだしてもらつた。

アンジローのその後の消息だが、薩摩の山川を出帆後、まずマラッカに行き、そこからさらにゴア（インド南西岸—ポルトガル領）におもむいた。

マラッカにむかう途中、船長のジョルジ・アルヴァレスよりキリスト教徒になることを勧められた。

マラッカに着いたとき、ザビエルは布教のためモルッカ（マルク）諸島（インドネシア東部の諸島）に渡つていたので、同人に会えず、そのため入信を断念し、ひとまず中国經由で帰国の途についた。

どうにか便船をえて故国にむかつたが、船は日本近海で暴風雨にあひ、中国のポルトガル船寄港地（マカオ？）に引き返した。その地でたまたまアルバロ・ヴァスと再会し、その船にのせてもらひ、ふたたびマラッカに着いたのは、同年十二月のことであつた。

このときはじめてアンジローは、モルッカ諸島から帰つていたザビエルと会うことができ、その勧めにしたがつてゴアに行き、翌天文十七年三月（一五四八・四）イエズス会のサウン・パウロ学院 Colégio de São Paulo にアンジローと連れ二人は入つた。一五四八年五月二十日の聖霊降臨の祝日に、三人はゴアの大寺院でフランチェスコ派の大僧正ジョアン・デ・アルブケルケによって洗礼をうけた。⁽⁴⁾

アンジローは、

「パウロ・デ・サンタ・フェ」

という名を授けられ、同人の兄弟は、

「アントニオ」

召使は、

「ジョアン」

と、それぞれ洗礼名をあたえられ、信仰の道に入った。

入信した日本人の教育を担ったのは、ゴアでイエズス会士となったコスメ・デ・トールレス神父（パイドレ）であった。

サウン・パウロ学院で三名の日本人は、他の修道士たちといっしょに暮らし、祈禱書によって祈り、食堂で食事をし、毎土曜日に告白し、日曜日には聖体を拝領し、二十日間以上もイエズス会の心霊修行をおこなった。

みずから「ジッポン人（日本人）」と称していた三名のうち、明敏な判断力とすぐれた記憶力（5）とまれに見る才気に富み（6）、修道士たちの称賛をえたのは、アンジローであった。

かれは鹿児島（7）の山川を出帆して以来、一年ほどのあいだに、船中のポルトガル人からポルトガル語を聞きおぼえ、さらにキリスト教理（7）についても少しは知識を得ていたとされる。

有能なアンジローは、みずから、

「わたしはすでにすこしポルトガル語を解し、また数語を話すことができた」

と語っている。

アンジロー（当時、三十六、七歳）は、知識欲が旺盛であり、サウン・パウロ学院にいた八カ月（8）ほどのあいだに、ポルトガル語の読み書きをまなぶことに専念した。かれはポルトガル語のみならず、ラテン語の読み書きもまあどうにかできたらしい（9）。

アンジローは非凡な記憶力をもっていたものか、コスメ・デ・トールレス師が二度ほど、聖マテオ福音書について説明したとき、第二回目には第一章から終章まですべて暗唱できたという。

ポルトガル語（ルシタニア語）をはじめて学んだ日本人は、だれそれであるとうかつに断定はできないが、すくなくともアンジローは、正式に同語を学習した先達のひとりとして記憶にとどめてよいであろう。

かれがポルトガル語を学んだことは紛れもない事実であるが、どの程度それに熟達していたものか。じっさいかれの学力はどれほどのものであったのか。

ザビエルは、新改宗者のアンジローにはじめて会ったときのことを、ローマにいるイエズス会の会友に報じた書簡（一五四八・一・二〇付）の中で、つぎのように語っている。

「そして今度は私に会ふことができたのである。アンヘロの喜びは、実に大きかった。我等の信仰のことを聴きたいと言ふ熱望を持って、私の所へ来た。かれはかなりのポルトガル語を話すので、私達は、互ひに了解することができた」（アルベ神父「井上郁二訳『聖フランシスコ・デ・ザビエル書翰抄』）

注・傍点は、引用者による。

この書簡は、コーチン（インド南部、マドゥライの西二〇〇キロにある港町）から出されたものである。

当時のアンジローの語学力は、まあまあのポルトガル語を話したということであろう。のちにかれはポルトガル語を書くことを覚え、書簡を出すにいたるのだが、かれがゴアよりローマにいるイエズス会の創立者ロヨラや同会の神父、助修士などに宛てて出した、インドに来るまでのいきさつをポルトガル語でつづった書簡（一五四八・一一・二九〥天文一七・一一・一九付）などは、日本人がはじめてヨーロッパの言語で、アルファベットを用いて書いた最初の文章とされている。

しかし、最近の研究によると、アンジローはたしかにじぶんの体験談をみずからポルトガル語でしたためたが、師のコスメ・デ・トレスの協力を経てなったものらしい。書簡の中に用いられている、ゆたかな語彙や聖書からの引用、接続法や分詞構文などは、かなりポルトガル語の文法に通じていないと書けない表現であることから、自力で書いたとはとても考えられぬ、という。

アンジローのポルトガル語の学力のほどについては、はっきりとしたことは判らないが、当時の日本人としてはかなりのレベルに達

していたものであろう。

かれといっしょに洗礼を受けたアントニオとジョアンも、「すでにポルトガル語を話し、読み、書くことを習ひ覚えていた⁽¹³⁾」という。アンジローは、もともとが武士階級の出身であつたらしく、「日本文字をひじょうに上手に書くことを知っていた⁽¹⁴⁾」とザビエルは語っている。が、戦国時代の武士で文武両道の達人は少なかったとされ、アンジローの国語力のほどもよくわかっていない。

アンジローは、トールレス師から聖マテオ福音書の説明をうけていたとき、その主要なる部分をかなで書きとめ⁽¹⁵⁾、またザビエルの聖教講義の一部を日本語で筆録した。かれは修道士のような服装をして授業をうけていたというが、単に受け身の受講者でおわらず、疑問があればいつでも師に質問をあげた⁽¹⁷⁾。

ザビエルは、アンジローらと接することによって、日本人が学ぶことが好きな国民であり、徳性と英知を有していることを知り、やがて神の福音を説くための日本布教を思いついたのである。

アンジローは、それほど学識の深い人ではなかったようだが、日本で最初のキリシタンとして、数種の著作をしたことは稀有のできごとであつた。しかし、かれが書きのこした著訳書は一つも残存していない⁽¹⁸⁾。

それらは、

「信条⁽¹⁹⁾の個条」(教理問答の抜書—マラッカにいたときの筆録)

「小ドチリナおよび大ドチリナ・キリシタン」(キリスト教教理書—日本語による筆録)

「聖マテオ福音書」(日本文字でメモし、記憶したものか)

「日本の事情」(一五四九年一月の報告)

「十戒」(大ドチリナの部分訳)

「書簡」(一五四八・一一・二九付と一五四九・一一・五付のものが二通ある)

などであつた⁽¹⁹⁾。

いまかかげたものの中には、日本語やポルトガル語で書いたものが含まれるが、書簡二通（ポルトガル語）をのぞくと、他は現存しない。

またザビエルはアンジローに、「十戒」や「小ドチリナ」（ジョアン・デ・バルシュ編⁽²⁰⁾キリスト教教理書）や「キリシタン教義提要」（天地創造、キリストの一代記などをするしたもの）などを翻訳させたが、アンジローはそれらをローマ字に綴り、説教のさいにザビエルによって利用された。

いずれにせよ、アンジローはサウン・パウロ学院にいたわずか八カ月ほどの間に、ポルトガル語の修得に大いに専念し、「かれに優る者はほとんどいないまで著しく上達した⁽²¹⁾」という。

またシャルルボワの『日本キリスト教史』（一八二八年）に、「パウロ・デ・サンタ・フェ（アンジローのこと）は、ラテン語とポルトガル語をひじょうにやすやすと話した⁽²²⁾」といった記述がみられるが、このことは信じがたい。

ザビエルは、日本への航海が、台風や海賊船の横行などにより、ひじょうに危険なものであることをじゅうぶんに承知していた。が、ついに一五四九年四月、日本布教の途にあがるべくアンジローとその連れの日本人兩名をともない、ゴアを出発し、ひとまずマラッカにむかった。

同年六月二十四日、一行はジャンクにのってマラッカを出帆し、八月十五日（天文一八・七・一二）鹿児島に到着した。アンジローは帰国後、ザビエルをたすけ、使徒らしい熱意をもってキリスト教の布教に大いに努めた。しかし、一身上に何か事情が生じたものか、徐々に信仰にたいする熱意をうしなっていっただらう。その末路についてははっきりしないが、一説によると中国の寧波⁽²³⁾において盗賊によって殺された⁽²³⁾という。

薩摩の国は山地が多く、食料品の補給を他国にたよっており、生活苦からかアンジローは八幡船⁽²⁴⁾（倭寇の船）にのり、中国に渡航したものとおもわれる（フロイス『日本史』⁽²⁴⁾）。

*

薩摩の人エルマノ・ベルナルド。

日本人としてはじめて改心し、キリシタン信徒第一号となったのはアンジローとその連れの人二人であったとすると、受洗した第二号は、鹿児島生まれの日本人ベルナルドであった。同人についても、日本名が何であったのか明らかでない。

ベルナルドは、鹿児島で受礼するまえ、仏僧であつたらしい。かれは貧しい青年であつた。勇氣と高潔な心をもち、つねにザビエルのそばを離れず、鹿児島、平戸、山口、京都へと伝道の旅につきそつた。ベルナルドは苦しい旅をいとわず、いつも腰に乾飯（25）をつめた袋をさげていた。

ザビエルは、この忠実な信徒に期待をかけ、ゆくゆくはじぶんが日本を去つたのち、後事をゆだねるに足る人間とみていた。

天文二十年（一五五一）、ザビエルは大友義鎮（宗麟）がインド副王に送つた使節（上田玄佐）一行とともにドゥアルテ・ダ・ガマのポルトガル船で豊後国の日出港（ひでし）を出帆するとき、

ベルナルド

マテオ（山口に生まれ、一五五一年に受洗）

を同伴した。

両人はポルトガルやイタリア（ローマ）を見たい、といった希望をもっており、帰国後は見学したキリスト教国のようすを同胞に聞かせてやりたいとおもつていた。

天文二十一年（一五五二）三月、ザビエルはインドを去り、マラッカを経て中国へおもむこうとするのだが、一五五二年十二月三日中国潜入をはたすことなく上川島（サンチニアン）において四十七歳の生涯をとじた。

ザビエルはインド不在ちゅう、ゴアの学院長ガスパーレ・バルゼオ神父に、ベルナルドとマテオの保護と兩人をポルトガルへ出発させる世話を依頼した。しかし、マテオはヨーロッパにむけて発つまえに、ゴアの酷暑に耐えきれず、サウン・パウロ学院において亡くなつた。

マテオは、ゴアの学院にいた数カ月のあいだ、その謙讓の徳とたえまない祈りの精神によって、神父たちの驚きの的であつた。（26）

一五五三年三月(天文二二・二)ごろ、ベルナルドは、アンドレア・フェルナンデス、アンドレア・カルバリヨらとともに、ゴアを出帆する艦隊(六隻)のうち一隻にのり、ヨーロッパにむかった。

艦隊は苦しい、危険な航海をへて同年九月、リスボンに到着した。が、航海ちゅう、僚船を二隻うしなった。ベルナルドは、もともと頑健なひとでなかったらしく、長い航海ちゅう弱わり、リスボンに上陸すると、すぐ病床に臥さねばならなかった。

しかし、リスボンの聖アンタワン学院 Colegio de S. Antão で数カ月静養するうちに、徐々に体力を回復した。ベルナルドは体がよくなると、まず主禱文を習った。かれは、ほかのことを習う必要はない。わたしの知りたいことは、すべてこのお祈りの中にある、⁽²⁸⁾ といひ、勉強の内容も主禱文だけでじゅうぶんです、と語った。

ベルナルドはリスボン滞在中、シモン・ロドリゲス神父をはじめ、イエズス会のだれからも愛され、ドン・ホアン三世の謁見をうけ、やがてローマにむけて出発した。

ベルナルドは、看護修士ルイス・クワレスマに付きそつてもらつて、リスボンよりひとまずコインブラ(ポルトガル中部の古都)におもむき、そこから陸路イベリア半島を横断してローマにむかうことにした。

一五五四年七月十七日、ベルナルドはコインブラを出発し、サラマンカ、セゴビア、バレンシアを経て、バルセロナにむかう途中、⁽²⁹⁾ 真夏の暑さと旅のつかれにより二度も倒れた。が、休養をとりつつゆくりと旅をつづけた。そしてバルセロナよりシシリア島に行く船にのり、同島に立ちより、さらにナポリを経て、ついにあこがれの地であつたローマに到着した。

ローマに着いたのは、翌一五五五年の一月五、六日のことである。ローマでは、⁽³⁰⁾ 都見物に数週間すごし、とくに教会や殉教地などをおとずれ、ザビエルの友人イグナチオ・ロヨラをはじめ、枢機卿、司教、その他の重立つた教会関係者と会つて歓待された。

ローマでは創立間もないコレジオ・ロマノ(現・グレゴリオ大学)でラテン語や哲学を学んだようであるが、哲学の学習では、師とともにその時間をすごすことよりも、⁽³⁰⁾ 聖体祈念で神とともにすごすほうを好んだ。しかし、コレジオ・ロマノの学院での勉強は、長くはつづかなかつた。

出来たての学院の経営は苦しく、学生を分散し、スペインやポルトガルの大学に送ることになつたからである。

一五五五年十月十八日、ベルナルドは聖遺物、聖水、聖画、メダル⁽³¹⁾などをたずさえ、カマラ神父と十二名の神学生とともにローマをあとにした。陸路ジェノヴァにむかい、当地には同年十一月二十八日に着き、約一カ月ほど滞在したのち、十二月二十一日出帆し、翌年の元旦にアリカンテ（スペイン南東部、地中海の小湾にのぞむ港町）に着き、そこから再び海路をとり、一五五六年二月十二日目的地のリスボンに到着した。

そこから他の神学生とともにコインブラにおもむいた。が、体調がすぐれず、翌一五五七年の新年をむかえるころ、病状が悪化し、ついに床に倒れてしまった。そして二月下旬ごろ、病により天国へと旅立⁽³²⁾った。

その死因については、明らかでないが、ヨーロッパに來たときすでに肝臓をわずらっており、またローマにむかう途次、サラマンカで倒れたとき、高熱と肝道閉塞⁽³³⁾とに悩まされていたという。

生前、ベルナルドは、高き徳性、献身、あつい信仰とによって人々を魅了⁽³⁴⁾した。かれは謙讓の美德の権化であった。慈愛にみち、禁欲家にして寡黙であった。必要なとき以外、めったに口を開かなかつた。財産、祖国、いっさいの被造物に目もくれず、ひたすら神に仕えるほか他志がないようだった。その志は、アンジローと大きな隔りがあつた⁽³⁵⁾という。

ベルナルドはある程度、神父よりポルトガル語、ラテン語、哲学などを学んだはずだが、学習のようすについてくわしいことはわかっていない。

*

天正遣欧少年使節。

天正十年一月十八日（一五八二・二・二〇⁽³⁶⁾）、九州の三大名（大友、有馬、大村）の名代として少年使節ら四名は、宣教師ヴァリニャーノ、ジョルジ・デ・ロヨラ（日本人教弟）、ディエゴ・デ・メスキタ（日本語をよくするポルトガル人通訳）、その他氏名不詳の従者二名（日本人）らとともに、長崎を出帆し、ヨーロッパへむかつた。

四人の使節とは、

- 正使 伊東マンシヨ（大友義鎮の使者）
同右 千々石ミゲル（大村純忠と有馬晴信の使者、千々石直員の子）
副使 中浦ジュリアン（肥前中浦の生まれ）
同右 原マルチノ（大村純忠の家臣、肥前波佐見の生まれ）

らであった。

少年使節のヨーロッパ派遣は、ヴァリニャーノが立案し、その勧めによったもので、目的は二つあった。

一 ローマ教皇とポルトガル王に敬意を表し、将来日本における布教活動に援助を要請する。

二 日本人にヨーロッパのキリスト教文物の盛んなることを実見させ、帰国後その見聞を同胞に吹聴することによって、間接に布教事業を盛んにする。⁽³⁷⁾

使節にいずれも若者がえらばれたのは、かれらが年配の者とくらべて、体力があり、長途の航海や気候風土の変化にも堪えうるとの判断から出たものらしい。

使節らが、長崎からマカオを目ざして出帆するとき、その近親者らは別れを惜しんで涙をながしたばかりか、無事に帰国できないであろうと暗黙の覚悟をした。

一行は同年二月五日（三・九）、マカオに到着した。が、折悪しく季節風^{モンスーン}を逸してしまっており、やむなくイエズス会の学院^{コレジヨ}（「サウン・パウロ」）の宿舎に入り、風季がおとずれるまでの約九カ月、同所に滞在した。

一行は、マカオにおいて知事のジョアン・デ・アルメイダや司教（レオナルド・デ・サア）をはじめ、神父たちから大いに歓迎された。その間に少年使節たちは、ポルトガル語の文字を書くけいこをし、またラテン語の学習にはげんだ。⁽³⁸⁾

若い使節らは数日間休養をとったのち、日課としてもっぱら語学の勉強に精をだした。みなひととおりポルトガル語を理解でき、あ

る者はよどみなくカステイリーヤ語（スペイン中部地方のことば）を話すことができたという⁽³⁹⁾。しかし、他国人と会話をするとき日本語で話し、通訳のディエゴ・デ・メスキタがそれをポルトガル語に訳して相手につたえた。ラテン語の力は、ポルトガル語に比べて劣ったものか、あまり進歩はみられなかった⁽⁴⁰⁾。またイタリア語は、ほんの少し知るのみであった。

一五八二年十二月三十一日（天正一〇・一二・七）、一行はマカオを出帆し、翌年一月二十七日にマラッカに到着した。そこからさらに航海をつづけ、やがてコーチン（インド）に着き、大歓迎をうけた。二月二十日（天正一一・一・二八）同地を出帆し、つぎの寄港地をめざした。

語学の学習は、航海ちゅうも日課としてつづけられた。公子たちは、一日の多くの時間を日本語の読み書きにつかい、残りをラテン語の学習に使った。勉強がおわると、四人とも聖母の連禱（ラダイニヤ）やその他のお祈りをとなえ、祈禱の反復復誦をおこなった。かれらはマタイによる福音書をポルトガル人から聴くのが好きであり、とくに第五、六、七章を好み、気に入った節を暗記した⁽⁴¹⁾。ラテン語の学習には少なからず困難をおぼえ、なかなか進まなかったかも知れないが、すぐれた記憶力をもっていた原マルチノだけは、その進歩が著しかった。

*

キリシタン信徒と語学。

日本におけるキリスト教（天主教）の伝道史を概観すると、大きく七期に分けられそうである⁽⁴²⁾。

第一期 天文十八年（一五四九）～永祿十二年（一五六九）……フランシスコ・ザビエルによってキリスト教が伝えられ、やがてイエズス会の宣教師が漸次来日するようになり、それが九州や京坂地方にまで広がりを見せ、諸大名の庇護をうけた。約二十余年間。

第二期 元龜元年（一五七〇）～天正十五年（一五八七）……キリシタンの興隆期。室町幕府が滅亡し、織田信長や秀吉の時代が到来する。巡察使ヴァリニャーノが二回目の来日をはたし、京坂でキリスト教が盛んとなり、九州のキリシタン三大名が遣欧使節を派遣する。この間、各

地に天主堂（教会）がつくられ、信徒のための教育機関が設けられる。約二十年間。

第三期 天正十五年（一五八七）～慶長五年（一六〇〇）……キリシタンの迫害と禁教の時代。秀吉が禁教令を発し（天正十五年）、九州および京坂地方におけるキリシタンの勢力が一時おとろえた。この間、フランシスコ会、ドミニコ会、アウグスチノ会の宣教師らが来日し、イエズス会と反目した。長崎においてキリシタン信徒二十六名がはじめて処刑された（慶長元年）。約十五年間。

第四期 慶長五年（一六〇〇）～同十八年（一六一一）……局部的な迫害はあっても、信徒の数はふえ、キリスト教は九州・京坂地方から関東、東北方面にまでおよんだ。京都や江戸の教会堂が破壊され（慶長十七年）、翌年多数のキリシタンが江戸で処刑された。約十五年間。

第五期 元和元年（一六一五）～寛永十五年（一六三八）……キリシタン迫害の時代。イスパニアとの国交断絶（寛永元年）。家康はキリシタン大追放令を発し（慶長十九年）、京都のキリシタンが火刑に処せられた（元和五年）。長崎でキリシタン五十五名が処刑された（元和の大殉教）。禁教遂行のため、あらゆる迫害方法を用いた。やがて天草島原のキリシタンが蜂起し、原城に立てこもり幕軍と一戦をまじえ、虐殺された（寛永十四年の島原の乱）。約二十三年。

第六期 寛永末年（一六四〇）～安政の開国（一八五〇）……キリシタン潜伏の時代。ポルトガル人の来航を禁じ（寛永十六年）、南蛮の商人や宣教師の渡来がとどえた。イタリアの宣教師シドゥッティが屋久島に到着し（宝永五年）、のち江戸に送られた。まれに日本に潜入をはかる宣教師がいたが、ほとんど捕縛され、拷問にあたり、処刑された。約二十三年間。

第七期 安政の開国（一八五〇）～明治六年（一八七三）……キリシタン復活の時代。慶応元年（一八六五）三月、新たに建立された長崎大浦の天主堂の門前に、かくれキリシタン十五名ほどがはじめて姿をみせた（信徒発見）。のち浦上の大勢のかくれキリシタンらが捕えられ、津和野・萩・福山の三藩に流罪となる（明治元年）。のちキリスト教の信仰は黙許され、宗門禁制の高札が取りはずされる（明治六年）。信教の自由を保障されたのは明治二十二年（一八八九）二月の帝国憲法発布によってである。かくして慶長十九年（一六一四）に家康がキリシタン大追放令を発して二七五年後に、日本人ははじめてキリスト教を公然と信じることができた。

ポルトガル船がわが国に来航するようになったのは、西暦紀元の十六世紀——室町（戦国）時代から安土桃山時代にかけてのことである。いま編年史的にその来航をしるすと、つぎのようになる。⁽⁴³⁾

天文十年（一五四一）七月……………シャムより中国にむかうポルトガルの商船二隻は、暴風雨にあい、一隻は鹿児島湾に入り、もう一隻は同年七月二十七日臼杵湾を経て神宮寺浦（現・大分市の沖）に着く。

天文十二年（一五四三）八月……………ポルトガル船、種子島の西之村浦に漂着（「長崎実録大成」第七巻）。

天文十三年（一五四四）春……………ポルトガル船、種子島の熊野浦に来航。船客のなかに鉄鉋鍛冶がおり、領主の種子島時堯は金兵衛（清定）に鉄鉋の製造法をまなばせた。

同年十一月……………薩摩にポルトガル船が来航し、交易をもとめる。

天文十五年（一五四六）七月……………南蛮船（ポルトガル船？）、豊後国（現・大分県）の佐伯浦・臼杵湾に来航し、交易をもとめる。

同年八月……………フェルナン・メンデス・ピント、アルヴァロ・ヴァスラマラッカより種子島にくる。のち薩摩の山川、豊後の府中（現・大分市）に寄り、交易する。

天文十八年（一五四九）七月……………フランススコ・ザビエルの一行、薩摩の鹿児島に到着。

同年の冬……………ポルトガル商船、肥前の平戸にはじめて来航する。

天文十九年（一五五〇）九月……………ポルトガル人ドゥアルテ・ダ・ガマの船が肥前の平戸島河内浦（現・平戸市の西南六キロ、千里ヶ浜）に来航。藩主松浦隆信は、交易によって利益を得んとし、通商をゆるす。南蛮通詞を置く。京、堺、その他より商人が平戸に来るようになり、日葡貿易が盛んになる。

天文二十年（一五五一）七月……………ポルトガルの商船、豊後国日出港（現・大分県速見郡日出町―別府湾北岸の町）に来航。同年、周防国山口においてキリシタンのための正規の学校が創られ、語学・神学・哲学・自然科学などを教授する。

天文二十一年（一五五二）八月……………ドゥアルテ・ダ・ガマの船、鹿児島に来航。同船にはバルタザル・ガゴ、ドゥアルテ・ダ・シルヴァ、ピエール・アルカセヴァらの神父およびポルトガル商人ルイス・デ・アルメイダらがのっていた。この一行は、ザビエルがインドにおいて編成した第二回目の日本派遣の布教団。

弘治元年（一五五五）五月……………ポルトガル船、種子島に来航し、砲術をつたえる。

永祿四年（一五六一）七月……………ルイス・デ・アルメイダは、肥前の横瀬浦（現・長崎県西彼杵郡瀬川村）に碇泊滞在ちゅうのポルトガル人とともに大村におもむき、藩主大村純忠と交渉し、横瀬浦をポルトガル貿易の港と定める。

元龜二年（一五七二）……………

……………ポルトガル人トリスタン・ヴァス・ダ・ヴェイガの船一隻とジャンク形船一隻、あわせて二隻、長崎に來航する。この年より長崎はポルトガル人の貿易港となり、またキリスト教布教の根拠地として發展してゆく。

これまで日本に來航したポルトガル船は、個人の貿易船であったが、これ以降、ポルトガル政府の官許船が年一回一隻定期的に日本に渡來するようになった。

ポルトガルの商船は、はじめ種子島や鹿児島、山川あるいは坊津あたりにやって來たが、のち豊後の佐伯浦・臼杵・府中・日出などに着き、やがて肥前の河内浦・横瀬浦・福田、また島原の口ノ津などに來航するようになった。元龜二年（一五七二）にはじめて長崎に入港し、その後はしじゅう長崎に來航した。

來日したポルトガル商人との通商には、お互い意思を疎通するための手段として言葉が不可欠であるが、港に集まってきた諸国商人は、混合破格のポルトガル語を用いていたものらしい。かれらは商品の名称や取引用語などを逸早くおぼえ、交易のさいに用いた。また語学の才のある者も生まれ、通訳の任にあたったかと思える。

とくにポルトガル人のために開かれた長崎では、住民は子供のころからポルトガル語を耳にしていた。ポルトガル人の中には、日本女性といっしょに暮らし、家庭をもつ者も少なからずいたから、長崎では早くからポルトガル語が標準ヨーロッパ語として用いられていた。

また長崎人の多くは、キリシタンであったため、神父の説教を聴き、讚美歌をうたい、宗教上の儀式や行列にも参加した。

南蛮貿易に従事する日本商人は、商品の名称、度量衡、貿易用語などをすっかり心得ておく必要があった。長崎人の中には、中国のマカオ、ルソン（フィリピン）をはじめ、東京、ジャワ、シャム、マレー半島や南洋諸島と往來するものがあり、かれらはポルトガル語や往った先々のことばにも少なからず通じていた。

長崎においては、南蛮人との間で、ピジン英語ならぬ、日本語・ポルトガル語・マレー語などの混合語が用いられたようである。

なみに南蛮通詞(事)が任命されたのは、元和二年(一六一六)のことである。

ポルトガル語は、宣教師の日常語であるばかりか、伝道のためなことばであり、またラテン語はキリシタン信徒にとって重要な宗教用語であった。

ローマカトリック教(旧教)が日本に伝わったころの布教の方法は、どのように行なわれたのであろうか。キリスト教の教理の教え方は、およそつぎのようなものであった。

宣教師はまず天地の創造や靈魂の不滅から説きはじめ、ついでキリストの一生(苦難、死去、復活、昇天など)について語り、さらに十戒(decálogo)、モーゼがシナイ山の頂上で神から与えられた十カ条の戒め)やふつう用いる祈禱のことばをおしえ、洗礼をうけさせ、イエス・キリストの御名やマリアの名を唱えれば、天国に行けると説いたようである。

宗教上の理屈は、俗衆にとってむずかしすぎるので、それにはふれず、およその観念をあたえるだけにとどめた。

ザビエルは、鹿児島について程なく、アンジローにキリスト教問答(ドチリナ・キリシタン)やキリストの生涯を翻訳させ、ローマ字に綴って説教のさいに用いた。ザビエルは当初、キリスト教の観念を伝えるのに、なるべく仏教用語を使用した⁽⁵¹⁾が、それだけではじゅうぶん意が通じないことがわかると、ポルトガル語やラテン語をそのまま用いた。かれが鹿児島で布教をはじめたとき、「神」のことを「大日」(真言宗でつかう)の語で表現して失敗したので、ラテン語の Deus を使用することにした。

左にかかげた語は、日本文字を用いず、ラテン語やポルトガル語を使った例である。

アニマ	(靈魂)	(ラ)anima	アンジヨ	(天使)	(ポ)anjo
オランヨ	(祈とう)	(ラ)oratio	カタウリカ	(カトリック)	(ラ)catholica
カテキズモ	(教理問答)	(ラ)catechismo	キリシタン	(キリスト教信者)	(ラ)Christan
クルス	(十字架)	(ポ)Cruz	ロンヒサン	(告白)	(ポ)Confican, Confissão
サセルダウチ	(司祭)	(ポ)Sacerdote)	サント	(聖なる、聖人)	(ラ)Sancto)

セヨ	(空、天、)	(ラ) Ceo)	デウス	(神、天主)	(ホ) Deus)
ドチリイナ またはドチリナ	(教理・教義、)	(ラ) Doctrina)	ドミンゴ	(日曜日)	(ホ) Domingo)
パウテル	ナウステル またはパウテル ノウステル	(主禱文)	パアテレ	(神父、父)	(ホ) padre)
パウチズモ	(洗礼)	(ホ) bapismo)	パッパ	(法王)	(ラ) (ホ) Papa)
パライゾ	(天国)	(ホ) paraiso)	ヒイデス	(信仰)	(ラ) fides)
ビルゼン	(童貞女、聖母マリア)	(ラ) Virgen)	ホロヘエタ	(予言者)	(ラ) Propheta)
マンダメント	(戒律)	(ホ) mandamento)	ミイサ	(ミサ)	(ラ) (ホ) Missa)
ロザイロ	(ロザリオ、念珠)	(ホ) rosario)			

また外国で用いられている符号(略字)も、そのまま使用した。

- D …… デウス deus または ds
 Jx …… ゼス キリント Jesus Christo
 X …… キリント Jesus Christo
 Js …… ゼズス

十六世紀の日本には、まだ学校制度がなく、庶民教育は寺院を学校とし、普通教育の萌芽とみるべき小屋(寺小屋)教育がおこなわれたが、僧侶から読み書きや道徳をまなんだ。⁽⁶⁶⁾ 宣教師が日本にきてまずおどろいたのは、日本人の識字率の高さであり、読み書きができる日本人の多いことであった。

ザビエルが来日した一五四九年(天文十八年)当初、かれは日本にキリシタンの学校をつくる考えはなく、日本布教の地盤を築くま

で、ゴアのサウン・パウロ学院にクリシタン信徒を派遣して、そこで伝道士としての教育をうけさせる考えでいたらしい。⁽⁵⁷⁾

のちかれは何名かの有能な伝道士を育てることに成功したが、信者の数がふえるにしたがって、さらに布教補助者として教理問答士、^(カキキスツ) 聖祭補助者、通訳などを養成する必要にせまられた。

日本の仏僧のなかには男色とその他の悪徳に染っている者がおり、⁽⁵⁸⁾ 無垢な子どもたちを悪から守るためにも、かれらをクリシタンにすることが望まれ、イエズス会は教育に着手した。

キリスト教徒の子供たちのための最初の初等学校⁽⁵⁹⁾ (教理学校) は、永祿四年(一五六一) 豊後の府内(現・大分市) に設けられた「住院」^(カクシヤ) (教会堂のようなもの) でおこなわれた。ついで翌永祿五年(一五六二) から同六年にかけて、ルイス・デ・アルメイダによって、横瀬浦、島原の口ノ津にもおなじような学校が開校した。⁽⁶⁰⁾

教師は、神父や助修士^(イムヂヤン)、日本人の改宗僧、伝道士らであり、教科は、時代やそれぞれの場所によって異なるが、およそつぎのようなものであった。⁽⁶¹⁾

公教教理……………府内では、生徒は「主禱文」^(イイナク、スツク) 「アヴェ・マリア」 「使徒信経」をラテン語で記憶し、「神と教会の誠律」 「大罪」

および仏教大意 「善行と愛のおこない」などを日本語で暗誦した。

讚美歌……………「主よわれを憐れみたまえ」 「アヴェ・クルス」 「アヴェ・マリアいませり」 「アダム物語」 「キリスト受難の秘法」

「聖母歌」 「サルベ・レギナ」

語学……………国語、ポルトガル語、ラテン語、神学、哲学、論理学など。⁽⁶²⁾

唱歌および器楽……………(ヴィオラ、クラボ)、宗教劇

数学、絵画(油絵、水彩画)、銅版画

典礼(儀式)の実習

とくに語学についていえば、日本においてポルトガル語やラテン語の読み書きが正式に学ばれたのは、イエズス(耶蘇)会の教育機

関においてであった。

前者のポルトガル語について、それがどんな教材を用い、まだどのように教えたものか明らかでない。しかし、府内の学校に学んだ山口の富裕な商人の子ジョアン・デ・トレスは、日本人のなかでもっとも巧みにポルトガル語を話すことができる一人であったとされ、助修士として知られた。かれは宣教師の語学指導をつとめた。⁽⁶³⁾

また幕府は、元和五年（一六一九）八月二十九日、京都の六條河原においてキリシタン五十七名を焚殺に処したが、そのとき殉教したジュアン太兵衛は、子どものころからポルトガル語を学び、洋書をすらすらと読み、文字とともに徳を、ことに謙遜を汲みとったという。⁽⁶⁴⁾

とくにラテン語は、教会の典礼（儀式）をおこなう必要から、イエズス会の諸学校においては、きわめて重要な科目であった。日本人の信徒は、天文から慶長年間（一五五〇年代〜一六一〇年代）にかけて、各地に設けられた学林において古典ラテン語の初歩をまなび、さらに学力に応じ上級のラテン語を学習した。

イエズス会が日本において創った各種学校は、つぎのようなものである。

初等学校（セミナリオの予備校のようなもの）……………この学校でのおもな学科は、日本文字とラテン文字の読み書きであった。⁽⁶⁵⁾

教場としては、伝道会の建物、寺などを用いた。子どもたちに日本語とラテン語で公教要理書をおしえ、さらに唱歌、算術、作法なども教授した。

セミナリオ（神学校 *seminario*）……………一般の信徒に必要とされる宗教教育（キリスト教義、仏教）をほどこし、とくに上流の子弟に学芸一般の教育をさずけた。日本語および日本史、ラテン語・ポルトガル語の読み書き、唱歌と楽器のひき方をおしえた。

ノビシヤード（修練院 *noviciado*）……………じっさい伝道に従事する布教師を養成した。

コレジオ（学院 *colegio*）……………生徒に日本語やラテン語文法のほか、神学・宗教学・民族学・哲学などをまなばせた。

日本に新たに赴任した宣教師に日本語を学習させ、また必要な学術をさずけた。その他、宗

教書（キリシタン版）、語学、文学書の編纂と刊行をおこなった。

日本においてはじめてキリスト教の教理をおしえる学校が設けられたのは、ザビエルが来日して二年後の一五五一年（天文二十年）七月のことであつたらしく、その場所は周防国の山口であつた。⁽⁶⁷⁾

ついで一五六一年（永祿四年）豊後の府内に初等学校が設けられ、十歳前後の少年たちが毎日、四、五十名ほど白衣を着、十字架を胸にかけて学校に通つた。少年たちの教育にあたつていたのは、修道士のギリエルメ・ペレイラである。

かれは多年にわたつてキリスト教の教理（ドチリナ・キリシタン）をおしえたが、子供たちの学習能力は高く、かれらは日本語とラテン語でそれをわずか数カ月のうちに習い覚えたという（フロリス『日本史』⁽⁶⁸⁾）。

またこのころ、平戸において子供たちに教理^{ドチリナ}をおしえていたジョアン・フェルナンデス修道士によると、生徒たちは「パーテル・ノステル」「アヴェ・マリア」「クレド」「サルヴェ・レジーナ」などをラテン語で覚えていたというし、死者を埋葬しに行くとき「ミゼレレ」（詩篇五〇）「ヴェニ・クレアトル・スピリトゥス」および連禱も暗記していた（フロイス『日本史』⁽⁶⁹⁾）。

ラテン語の発音そのものは、けつしてむずかしくはないが、少年たちは容易にそれになじんだ。しかし、文法のほうは学ぶに困難があつたかとおもえる。教理内容は、ラテン語と日本語で諳誦させたというから、子供たちはおそらく頭から丸暗記したものか。

また有馬の子供たちは、「主、述べたまふ」（Dixit Dominus）、「祝せられ給いし者」（Benedictus）、「子らよ、讃えよ」（Laudate pueri）、「讚美せよ」（Magnificat）、「打ちひしがれしイスラエルに」（In exitu Israel）、「（われら）を憐れみたまへ」（Misereere）、「アヴェ・マリス・ステラ」（Ave maris stella）などの讃歌をラテン語で歌うことができたという（フロリス『日本史』⁽⁷⁰⁾）。

*

一五七九年七月二十五日（天正七・七・二）、^{グレンステール}巡察使アレシヤンドロ・ヴァリニャーノが来日した。かれは島原半島の南端の口ノ津において、宣教師会議をひらき、布教のいっそうの発展のために一大計画をたてた。かれは日本の布教区を、

都

豊後

下〔肥前〕（大友領を除いた九州一円か）

の三教区にわかれ、各教区に、神学校・学院・修練所などの教育機関を分散して設けることにし、まず肥前の有馬と近江の安土に神学校を、また豊後の府内に学院を設立した。

ヴァリヤーノは、第一回目の視察をおえて日本を去る直前の一五八二年二月、「神学校内規」を作製し、発令するのだが、これは当時の学林での見習い修道士の生活がどのようなものであったかを明らかにしている点で興味ぶかい。

その大要をつぎにのべてみよう。

生徒の直接の長は、修道士であり、全権を託される。修道士は、生徒に規則を守らせ、外出のさいには同伴する。

入信は両親の希望と生徒本人の意志による。永久に教会に奉仕する者だけが入学を許可される。生徒は剃髪する。入学を許可するのは、若い身分のある者だけとする。

修道院には、四、五十名の少年が宿泊できるようにする。祭壇を美しくかざり、畳は毎年とりかえる。生徒は机といすで勉強する。

生徒は、日本文字の読み書き、ローマ字を習い、ついでラテン語の文章論、道徳、音楽、唱歌をまなぶ。アリストテレス、その他、非キリスト教徒の著書を読ませないようにする。

才能のある生徒は、クラヴォ、一弦琴、ギターその他の楽器の演奏をまなび、教会の祝祭を盛んにする。

生徒はこざっぱりとした服装をせねばならない。屋内では、青い木綿の帷子（ひとえもの）を着る。戸外では、青い衣服と黒いマント（胴服）をその上に着用する。

ふだんの食物は、白米を主食とし、汁と魚、その他の菜。日曜日と祝日には、一皿多く出し、果物かなんらかのごちそうを供する。食事のあいだ、生徒は日本語の読物とラテン語を人に読んでもらって聞く。

生徒は畳のうえで寝る。夜通しローソクをともし、夏は一週間に一回、冬は二週間ごとに入浴する。ときどき川か海に泳ぎに行つて

もよい。生徒は家族の家に行くことを許されない。

神学校の時間割について。

夏季は、午前四時半起床。司祭とともに祈り、五時ごろおえる。冬季もおなじ。ただし一時間おくらせることもある。

お祈りのあと、ただちにミサ聖祭に与かる。ついで主禱文を唱え、六時まで座敷をそうじする。六時から七時まで学課の勉強。幼少の者は、ラテン語の単語をまなぶ。七時から九時まで、ラテン語の教師のもとに行き、宿題をみせる。暗誦したことをおぼえ、教師が読み聞かせることを聞く。生徒は下級生を試問したり、かれらが書いた答を訂正してやる。

午前九時から十一時のあいだに食事をすませ、休養をとる。十一時から午後二時まで、日本語の教師が課す、日本語の書簡をしたためる。

午後二時から三時まで、楽器の演奏、唱歌を練習する。残りの時間は、休養をとる。三時から四時半まで、ふたたびラテン語の教師のもとに行く。このとき教師は、生徒にラテン語の一つ書かせ、また何か他の文章を朗読して聞かせる。五時ごろまで自由時間とする。

五時から七時までに夕食をとり、そのあと休養をとる。七時から八時まで、ラテン語を学ぶ生徒のために復習がおこなわれる。

午後八時に反省をし、夕べの祈りをしたのち就寝する。土曜日の午前中は、その週に学んだラテン語の復習に専念する。日曜日と祝日は、食後、別荘に行つて休養をとるか自由とする。夏季、ひじょうに暑いときは、校長の判断で、生徒を勉学から解放してやり休養をとらせる。⁽⁷⁾

*

しかし、ヴァリヤーノの方針にそつてはじまつたラテン語教育は、はじめあまり成果をあげなかつたようだ。その理由はいくつか考えられるが、たとえば八良尾^{はちらお}(島原北有馬町西正寺名八尾屋服田)の神学校^{セウリヤ}のばあい、当初、日本語とラテン語にじゅうぶんに通じた宣教師がいなかつたし、印刷機によつて刷られた教科書がなく、生徒は教師がもつているラテン語の聖書や原書を筆写せざるをえなかつた。それは辛気なしごとであつた。

しかし、ヴァリヤーノが第二回目の巡察のために来日した一五九五年（文禄四年）になると、生徒たちはマカオから舶載された印刷機によって刷った教科書が使えるようになり、ラテン語の勉強はすこし楽になった。だからそれまでに見られなかったほどの進歩をみせた（一五九三―四年度の年報⁽⁷³⁾）。

日本各地において印刷された語学書や辞書は、つぎのようなものである⁽⁷⁴⁾。

これらのキリシタン版は、日本人がポルトガル語やラテン語をまなんだり、あるいは宣教師が日本語をまなぶさいの教科書や参考書として編さん刊行されたものである。

ヴァリヤーノ編『日本のカテキズモ』*Catechismus Christianae fidei, in qvo veritas*……一五八〇年末から八十一年（天正八年末）同九年）にかけて府内のコレジオで編さんしたもの。

ジュアン・ボニファチオ Juan Bonifacio S.J. 著『キリスト教徒子弟の教育』*Christiani Pueri Institutio* ……一五八八年（天正十六年）刊

*ドュアルテ・デ・サンデ Duarte de Sande S.J. 著『遣欧使節見聞対話録』*De missione legatorum Iaponensium* ……一五九〇年（天正十八年）刊

*マノエル・アルヴァレス Emmanuelis Alvari 『ラテン語文典』*De Institutione Grammatica Libri tres. Coniugationibus accessit interpretatio Iaponica* ……一五九四年（文禄三年）天草のコレジオで刊行。

マノエル・アルヴァレス Manoel Alvares 著『ラテン・日本・ポルトガル語規則動詞変化』*Coniugação dos verbos regulares em Latin, Japonez e Portuguez*……一五九四年（文禄三年）天草のコレジオで刊行。

* 『ラテン・ポルトガル、日本語対訳辞典』*Dictionarium/Latino Lusitanicum, ac/Iaponicum ex Ambrosii Cale-/pini volumine depromptum* ……一五九五年（文禄四年）天草のコレジオで刊行。

『蘭日辞典』*Vocabulario da lingua Portuguesa*……兼教師がつくった稿本⁽⁷⁵⁾。

『日葡辞典』*Vocabulario/da lingua de Iapam/com adeclaração em Portugues feito por/Alguns Padres*.
……一六〇三年（慶長八年）長崎のコレジオで刊行。

【ロドリゲスの日本文典】*Arte da Lingoa de la-Jam composta pello/Padre Joao Rodriguez. Portugues da cõpa-nhia de Iesu diuidida em tres livros.*……………一六〇四年（慶長九年）長崎のコレジオで刊行。

* マノエル・バット *Emanuelm Barretum* 著『聖教精華』*Flosculi ex Veleris, ac novi Testamenti, S. Doctorum, et Insignium Philosophorum Floribus selecti.*—旧新約聖書、教会の博士、すぐれた作品から精選した詞華集
……………一六一〇年（慶長十五年）長崎のコレジオで刊行。

いまかかげたキリシタン版のうち、デュアルテ・デ・サンデの『遣欧使節見聞對話録』は、遣欧少年使節らが帰国の途次、マカオに滞在ちゅう、巡察使ヴァリニャーノが中国伝道の長老サンデに命じて、使節記をラテン語で書かせたものである。⁽⁷⁶⁾

サンデはただいわれるままにラテン文を綴っただけで、じっさいの著者はヴァリニャーノであったようだ。本書は稀書であるが、ポルトガルのリスボンの国立図書館や国内の各文書館にわずかながら架蔵されている。東洋文庫にも一冊、戦前に幸田成友^{しげとも}（一八七三—一九五四、昭和期の経済史家、文化交渉史家、露伴の弟）によって将来されたものがおさめてある。

日本においては、いろいろな制約があるため、キリシタン版の現物をじっさい手にとって見ることは容易ではない。が、わたしはポルトガルのエヴォラ（リスボンの東一〇九キロに位置する町）の公立図書館で同書を見つけた。

昭和初期に欧州留学ちゅうの幸田成友も同書をこの町でみている。エヴォラ本は、ヴェラムの元装本である。世界各地にある数少ないキリシタン版は、再製本したものがほとんどであるが、元装のまま見ることができるとは珍しい。

エヴォラ本は、扉にすこし欠損があったり、本を閉じるための皮ひもが二本ともなかったり、虫くいが随所にみられるが、全体からみると、状態はひじょうによく、まるでつい最近刷ったような印象をあたえる。本の天（あたま）および小口（書物の背の部分以外の三方）は、紫色で塗られているが、その色はいまではややあせている。

本の大きさは、たて20.5 cm、よこ14.5 cm。厚さは約2 cm、四六版である。本文は四二二頁。索引と正誤表が二二丁（二四頁）ある。用紙は中国紙を用いており、印刷はじつに鮮明である。が、本文の六頁から三三頁までと、三二六頁から三二八頁にかけてところどころ虫

くいがみられる。刊行年は一五九〇年（天正十八年）、場所はマカオのコレジオである。

マノエル・アルヴァレスの『ラテン文典』は、一五七二年（元龜三年）にリスボンで刊行されるとすぐに好評を博し、イエズス会の学校はこぞって同書を教科書として採用した。この文法書は、各地において続々と版をかさね、その略本を含めると、一五七〇年代に十五種、一五八〇年代に十七種、一五九〇年代に二十種の刊行をみ、十七世紀以後はますます盛んとなり、総計三百種類(註)にもなるという。

わたしは一五七二年刊の初版を見ていないが、英国ブリチイン・ミュージック・ライブラリー図書館においてあと版を八冊、じっさい手にとって見る事ができた。同図書館に架蔵されている、いちばん古いものは、一五九九年（慶長四年）版である。

同書はヴェラム装丁の本である。本の大きさは、たて20cm、よこ14cm。厚さは約5cmである。本文は七四〇頁。索引と正誤表が約五〇余ある。

同所のタイトルは、

E M M A N V E L I S

ALVARIE SOCIE.

TATE IESV

DE INSTVTIVIONE GRAMMATICA

LIBRI TRES.

ANTONII VELLESIEX EADEM SOCIETATE IESV

IN EBORENSI ACADEMIA PRAEPECTI STUDIORVM

OPERA

Aucti. & illustrati.

EBORAE

Excudebat Emmanúel de Lyra Typographus.
cum facultate Inquisitorum, & Ordinarij.

M. D. XCIX.

(大意) イエズス会のマノエル・アルヴァレスの文法入門(三卷)。

エヴォラの同学院において、アントニイ・フェレシがさし絵を入れ増補したもの。

詩歌の印刷技術者エマヌエルが、一五九九年エヴォラにおいて司教の吟味をへて刊行。

である。

内容は、名詞の語尾変化や動詞の活用にはじまり、ギリシャ語の動詞とそのアクセントについての解説でおわっている。

またエヴォラの公立図書館には、天草のコレジオで刷ったアルヴァレスの『ラテン文典』(一五九四年||文禄三年刊)が、貴重書として架蔵されている。わたしは日本では容易におめにかかることのできぬ元装の天草版と同所で出会えるとは、夢にもおもわなかった。この文法書はこげ茶色の皮装であり、本の大きさは、たて23.5 cm、よこ16.5 cm。厚さは2.5 cmである。用紙は「鳥の子紙」(雁皮||じんちょうげ科の落葉低木の樹皮で製される上等な和紙の一種)である。紙せんたいは、淡黄色をしている。ノンブルはなく、七十一頁が最終ページか。天と小口に朱色が塗ってあるが、色あせている。

同書のタイトルは、

E M M A N V E.

LIS ALVARIE SO.

CIETATE IESV

DE INSTVTIONE GRAMMATICA

LIBRI TRES.

Comungationibus accessit interpretatio

Iaponica

IN COLLEGIO AMACV.

SENSI SOCIETATIS IESV

CVM FACULTATE SUPERIORVM.

ANNO M. D. XCIII.

(大意) イエズ会のマノエル・アルヴァレスの文法入門(三卷)。

日本語の解説には、動詞の活用を添付した。

長老の許可をえて一五九四年天草のイエズ会のコレジオで刊行。

である。

アルヴァレスの『ラテン文典』の所在がわかっているのは、エヴォラの公立図書館とローマのアンジェリカ文庫 *Bibliotheca Angelica* のみである。

エヴォラ本は、あまり状態がよくなく、溝(本の細長くくぼんだ筋)から皮の表紙がとれている。鳥の子は、やや厚手のしっかりとした紙だが、各ページの活字を手でさわると、浮き上がらせるように刷ってあるような印象をうける。

リスボンの初版本と天草版とを比較した土井忠生(一九〇〇?)、昭和期の国語学者)によると、前者は通巻二四九葉、後者は一七〇葉であることから、天草版本は抄本だとい⁽⁷⁸⁾う。天草版本は、初学者のことを考慮して、用語としてはラテン、ポルトガル、日本語が用いられており、とくに動詞の活用表にはラテン語やポルトガル語以外に日本語がそえてある。

アルヴァレスの『ラテン語文典』は異本も多いが、みなポケットに入るような小型本である。アルヴァレスはラテン語の文法書以外

に『作詩法』*‘Prosodia’ del M. R. P. Emanuel Alvarez, de la Compañia de Jesus, con Privilegio, Cervera: en la Imprenta de la Real Universidad. Año 1764* のような本を著したが、わたしは後者の一七六四年版（ヴェラム製、15.3 cm × 0.9 cm。厚さは1.5 cm。二七〇頁）を先年、ヨーロッパ滞在ちゅうに古書で求め愛蔵している。

『作詩法』についていえば、英国図書館は一六三二年版（初版？）を一冊もっている（ヴェラム製、11.5 cm × 8.5 cm。厚さは約1 cm。一五九頁）。

中世におおく用いられたラテン語文典は、ポルトガル人アルヴァレスのものと、スペイン人アントニオ・デ・ネブリハ（Antonio de Nebrixa）の *Introducciones in Latinam Grammaticen*（『ラテン語文法入門』）だとい⁽⁷⁹⁾う。わたしは後者に久しく興味を抱いていたが、なかなかめぐり会えなかった。

しかし、同書をエヴォラの公立図書館で寓目する機会をえた。それはこげ茶色の皮装丁の本（一七三九年版）である。本の大きさは、たて29 cm、よこ19.5 cm。厚さは約3.5 cmである。状態はわるく、虫くいとシミが多い本である。総ページは二三九。細字がぎっしり印刷されている。

マノエル・バヘットの『*プロスオディア*』⁽⁸⁰⁾は、ポルトガル生れのイエズス会士マノエル・バヘットが、新旧両約聖書やギリシャ・ローマの著名人の著書から文章を抜いて編んだ、一種の名家文集である。

アリストテレスの「エティカ」、セネカの「書簡集」、エウリピデスの戯曲「ヘラクリーデ」、シーザーの「ガリア戦記」、キケロの論集、その他ローマの詩人バージル、ギリシャの詩人ホーマー、哲学者プラトンなどの詞章がアルファベット順に排列し、採録されている。

同書は、一六一〇年（慶長十五年）長崎のコレジオにおいて印刷されたもので、わが国のイエズス会の学林におけるラテン語教育の発展に大いに資したものと考えられている。

表題には、

F L O S C V L I

EX VETERIS, AC NOVI

TESTAMENTI, S. DOCTORVM,

ET INSIGNIVM PHILOSOPHO-

RVM FLORIBVVS SELECTI.

Per Emanuelem Barretum Lusitanum,

presbyterum Societatis IESV.

Cum facultate Ordinarij & Superiorum

N A N G A S A Q V I I.

In Collegio Iaponico eiusdem Societatis.

Anno Domini. MDCK.

(大意) フロスクリ——旧新約聖書、教会の博士、すぐれた作品から精選した詞華集。

イエズス会の司祭ルシタニアのマノエル・パヘット著。

長崎の教区司教ならびに長老の許可をえて、日本の長崎にあるイエズス会のコレジオで一六一〇年に刊行。

とある。

同書は現在、ポルト公立図書館（ポルトガル）と東洋文庫に各一冊所蔵されている。わたしは幸いこの名家文書をポルトガルと日本で二度実見することができた。

ポルト公立図書館の蔵本は、ひじょうに状態のわるいものであるが、おそらく元装本であろう。こげ茶色の皮装幀の本であり、大きさはたて23.7 cm、よこ17.5 cm、厚さは1.5 cmである。本文は一九〇頁、索引は五葉ある。用紙は鳥の子であるが、ところどころに虫くいや修理の跡がみられる。

表紙の前後に、ポロポロの日本手紙が数点張りつけてあるが、これについてはすでに研究紹介⁽⁸¹⁾されているのでここではふれない。

東洋文庫の蔵本は、大正八年(一九一九)にハーグの書店マルチヌス・ネイホフの「カタログ」⁽⁸²⁾にのったものを求めたものだが、皮ケース(16.5 cm × 23.5 cm)に収まっている。元装本ではなく、うす茶の皮で再製本したものである。本の大きさは、たて23.3 cm、よこ17 cm。厚さは2.2 cmである。天と小口は黄色くぬられ、ところどころにピンクや紫色の水玉⁽⁸³⁾がみられる。

一五九五年(文禄四年)に天草のコレジオで刊行された『ラテン、ポルトガル、日本語対訳辞典』は、イタリヤ人アンブロジオ・カレピノ Ambrosio Calepino, Ambrosius Calepinus (ラ) ⁽⁸⁴⁾が編んだラテン語辞典によって成ったものであるが、この辞書と関係した来日ヨーロッパ人のエピソードをひろっておこう。

*

十七世紀の中ごろ——一六五二年二月十一日(慶安五・一・二)、オランダの遣日使節アドリアン・ファン・デル・ブルクに随って参府旅行をしたスウェーデン人ウーロフ・エリックソン・ヴィルマン(一六二三?—一六七三?)、オランダ東インド会社勤務)は、江戸において献上した地球儀と地図のことを教えるために大目付井上筑後守宅をおとずれた。そのとき井上から、ポルトガル人がギムナジウムと印刷所を置いていた天草で刷った、

——ラテン語、ポルトガル語、日本語の三カ国語辞典。
をみせられた⁽⁸⁴⁾という。

その折、ヴィルマンは、この辞典はキリシタン屋敷が、キリシタン信徒から没収したものにちがいない、とおもった。

井上筑後守が、大目付となったのは寛永九年(一六三二年)⁽⁸⁵⁾のことであり、キリシタン支配をかねていたから、没収した同書を秘かに私蔵していたのかもしれない。

宝永五年八月二十九日(一七〇八・一〇・一二)のことである。⁽⁸⁶⁾大隅国屋久島(現・鹿児島県屋久島)という円形の島に、身のたけが五尺、八、九寸ほどの色の白い、黒髪の高鼻の男がやってきた。その男は、日本人とおなじように月代^{まげ}を剃り、和服を着、腰には

日本刀をさしていた。

が、日本人らしからぬ容貌やことば使いに島民からあやしまれ、ついに役人に捕えられた。その怪しい男は、布教のために鎖国下の日本に潜入をはかったイタリア生れの宣教師ジュアン・バプティスタ・シドッティであった。

同年十一月、かれは長崎をへて江戸におくられると、小石川の切支丹屋敷に幽囚の身となり、正徳五年十月二十一日（一七一五・一・一六）四十七歳で病死した。遺骸は屋敷裏門わきに埋められた。⁽⁸⁷⁾

シドッティは、日本に渡来するさいに、洋書を八冊ないし十一冊もってきたが、その中には「デキョナアリヨムといふ。これ我国のことばをしるして、彼方の語を以て翻訳せし所也」(『西洋紀聞』)といったものがあつた。

かれが携帯していた辞典というのは、古賀説によると、『ラテン、ポルトガル、日本語対訳辞典』(一五九五年、天草版本)ということだが、本当は『日羅辞典』ではないかといふ。⁽⁸⁸⁾

この辞典は、安永年間(一七七〇年代)まだ長崎に一冊はあつたようで、スウェーデン人、カルル・ペーター・ツンベルグ(一七四三〜一八二八、出島の医官、一七七五年来日)は、通詞宅に珍藏されていたことを伝えている。

ツンベルグは来日した年の秋ごろより、蘭通詞を相手として日本語の勉強をはじめたのであるが、まだ当時蘭和辞典のたぐいはなく、外国人が日本語をまなぶときに役立つような辞書はないか、通詞に探索させた。するとその通詞は家宅から、こんなものが出てきた、といつてツンベルグに書物を二冊みせた。

そのうちの二冊は、

RACVYOXY.

IN COLLEGIO IAPONICO SOCIETATIS

IESV.

cum facultate Superiorum.

『落葉集』——一五九八年、長老の許可をえて、日本のイエズス会のコレジオにおいて刷る。

と、表題紙にあるもので、通詞は「RACVYOXV」の文字をオランダ語に訳すことができなかった。

通詞はいった。

——この本は、日本語彙であって、ポルトガル語は一語ありません（山田珠樹訳註『ツンベルグ日本紀行』雄松堂書店刊）。

ツンベルグが見た同書は、漢字ヒラガナまじりの漢和辞典である。一五九八年（慶長三年）長崎のコレジオで、美濃紙一〇二葉に刷ったもので、現存する最古の国字本である。⁽⁸⁹⁾

ちなみにアーネスト・M・サトー（一八四三〜一九二九、駐日イギリス公使館書記官）は、シャム総領事として日本を去る前年の一八八三年（明治十六年）、同書をイギリスに持ち帰った。⁽⁹⁰⁾ サトウは、日本在勤ちゅうにこの『落葉集』を購求したらしく、いま英国図書館に収まっている。

通詞がみせたもう一冊のほうは、和紙に印刷された四ツ折版（約24 cm×30 cm）であり、表題紙がなく、手すれており、一方の角は焦げてさえた。ツンベルグは、表紙がなかったので、何年に印刷されたものか分からなかったが、「序文」によって、ヨーロッパおよび日本の教友会 Societas Fratrum Europoes Simulet Japoniorum が協力して日本で刷ったことを知った。

表紙と誤植訂正表をのせたさいこのページを除くと、九〇六頁あった。

「この本は一人の老人の通訳が持っていたもので、この通訳はその祖先から受け継いだものである」（『ツンベルグ日本紀行』）。

ツンベルグは、同書を見たとき、すぐこれは稀覯本にちがいないとおもった。⁽⁹²⁾

通詞は、この本をひじょうに貴重視していて、ツンベルグがいかなる額の金を提示しても、またいかなる品物を贈っても、ゆずろうとはしなかった。

かれが入手できなかった同書の表題は、つぎのような長たらしいものである。

D I C T I O N A R I V M
LATINO LVSITANICVM, AC

IAPONICVM EX AMBROSII CALE

pini volumine depromptum: in quo omnis no-

mibus proprijs tani locorum, quàm homi-

num, ac quibsdam alijs minus usitatis, omnes vocabulorū

significationes, elegantioresq; dicendi modi apponuntur:

in vsu, & gratiam Iaponicæ inuenturis, quæ Latino idiomati ope-

ram nauat, nec non Europeorū, qui Iaponicū fermone addiscunt.

IN AMACVSA IN COLLEGIO

IAPONICO SOCIETATIS IESV

cum facultate Superiorum.

A N N O M. D. X C V.

(大意) 『アンブロジオ・カレビーノの著書から編んだラテン・ポルトガル・日本語辞典』——地名・人名といった固有名詞やあまり用いられないものは省略した。すべての語彙の意味、上品なもの、語法などを添えたもの。同書は、ラテン語の慣用語法を熱心にまなぶ日本人のみならず日本語をさらに学ぼうとするヨーロッパ人からも利用され、かれらに恩恵をあたえるであろう。——一五九五年、長老の許可をえて、日本の天草にあるイエズス会のコレジオにおいて刊行。

一五九五年(文祿四年)に天草のコレジオで刷ったこの『ラテン、ポルトガル、日本語対訳辞典』は、

読者への「序」……………	二頁
本文……………	九〇一頁
付録……………	四頁
正誤表……………	二頁 ⁽⁹⁸⁾

から成り、ラテン語の見出しに対して、ポルトガル語とローマ字つづりの日本語（鎌倉、室町時代の語をも含む⁽⁹⁴⁾）で語句の意味をあたえたもので、全部で九〇九頁ある。見出し語の数は、三二〇〇⁽⁹⁵⁾を超えるという。

一八七〇年（明治三年）、長崎の大浦天主堂の司教ベルナル・ターデ・プティジャン司教（一八二九〜一八八四）は、この天草版の辞典からポルトガル語をすべて削除し、新たに『羅和辞典』を編み、ローマで刊行した。わたしは同書の原物を上智大学のキリシタ文庫でみたが、表題には、

LEXICON

LATINO-IAPONICUM

DEPROMPTUM EX OPERE

CUI TITULUS

Dictionarium Latino-usitanicum ac Iaponicum

typis primum mandatum in Amacusa in Collegio Iaponico

Societatis Iesu anno Domini M. D. XC. V.

NUNC DENDO

EMENDATUM ATQUE AUCTUM

VICARIO APOSTOLICO IAPONIAE

(大意) 『羅日辞典』——天草にある日本のイエズス会のコレジオにおいて、一五九五年にさいしよに印刷に付された『羅葡日辞典』のタイトルをもつ著作から借用したもので、日本の使徒の代理人によっていま新たに剛正し増補したもの。

とあった。

本の大きさは、たて27 cm、よこ19 cm。厚さは6.4 cmである。総ページは七四九である。扉のうらに、

本書ハ後奈良天皇天文十四年肥後国

天草ニ於テ耶穌キリスト会修士等ノ手ニ和訳

セラレシ拉典葡萄牙及日本語辞書ヲ麻

尼拉ニテ発見シ之ニ多少ノ修正ヲ加メテ明治

三年羅馬マニラ於テ印刷セル者也

とある。

プティジャン師は、一八六九年(明治二年)フィリピンのマニラにおいて、キリシタン版の『ラテン、ポルトガル、日本語対訳辞典』(一五九五年)を発見し、それを日本に持ち帰り、翌年ローマにおいてこの『羅日辞典』*Lexicon Latino-Japonicum*を出版した。

この辞典を編むとき依拠したキリシタン版の辞典は、惜しいことに明治七年(一八七四年)に横浜教会が火災にあったとき、失われ⁽⁵⁶⁾たらしい。なお、英国図書館には、プティジャン師の『羅日辞典』が二冊ある。

*

イエズス会の教育機関がいちばん機能をはたしたのは、天正・文禄・慶長の約三十年間であるが、この間に明智光秀の謀反による安

土の擾乱や秀吉の禁教令などの余波をうけて、各地にあったイエズス会の学林は、たびたび併合と移動をくり返さねばならなかった。さらに追い討ちをかけるように、慶長十九年（一六一四）、キシタンの大迫害がおこなわれ、宣教師や信徒がマカオやマニラに追放され、イエズス会による宣教師養成のための教育もついに終えんをむかえ、天主堂（教会）や学校などごとく破却された。

*

長崎のポルトガル通詞。

肥前国彼杵郡長崎は、もとの名を

「深江浦」

といった。

水深があることから、そのように呼ばれたものであろう。

元龜元年（一五七〇）の春、ポルトガル船がはじめて長崎に来航した。そのときポルトガル人は、長崎が良港なることをはじめて知るのである。「航路ノ瀬方（場所）ヲサグリ、海ノ深サ、浦（入江）ノ景色ヲ見ルニ、瀬（急な流れ）ナクシテ、海深シ」（長崎草創の事）「大村家覚書 卷三二所収」。ポルトガル人は、地頭長崎甚左衛門と来年より来航すべきことを約束し、交易したのち帰航した。領主大村純忠は、貿易をゆるし、市街をひらくために翌年三月、家臣の友永対馬を長崎につかわし、この物寂しい漁村の地割り（土地の区画）をはじめ、島原町・大村町・外浦町・平戸町・文知町・横瀬浦町をつくった。

当時の長崎は、草の生い茂った野原であり、丘陵地にはうっそうと茂った樹木がみられるところであった。そのような寂しい土地に、わずかに六町より成る小さな街ができた。天正から慶長年間（一五九〇～一六一〇年代）にかけて、住民もふえ、人口五千人ほどの町になった。

ポルトガル船は、天文年間に種子島に来航してから二十八年のあいだに福田浦、横瀬浦その他の港と出入りしたのであるが、元龜二年（一五七二）より

「長崎湊」

に入港するようになり、ここを唯一の貿易港とした。

そして日が経つにつれて、長崎に諸国商人やポルトガル人が住みつくようになった。

長崎のポルトガル人は、自由に町内に散らばって住み、日本人と交際し、また日本人女性と同棲したり、婚姻関係をもったりしたが、中には子供をもうける者もいた。こういった雑居状態は、ポルトガル語の修得を大いに促進した。

しかし、ポルトガル人が町内に日本人と雑居をつづけるのは弊害が多いとの理由から、寛永十一年（一六三四）幕府は町の豪商二十五名に命じて、江戸町の沖に人工島（三九六九坪）をつくらせた。同十三年（一六三六）それが完成すると、ポルトガル人はみな市街の散宿を禁じられ、その

「築島（出島）」

に移住させられ、この島にかぎり在留をゆるされた。

表門には番人をおき監視させ、商用で出入りする者以外は、いっさい往来を禁じられた（「南蛮人出島ニ令在住事」『長崎実録大成 第七巻』所収）。

この年、幕府は長崎においてポルトガル人の子として生まれた男女二八七名をマカオに追放した（「蕃人ノ種子阿媽港ニ被相渡事」『長崎実録大成 第七巻』所収）。

寛永十四年（一六三七）十月、突如、島原と天草においてキリシタンの反乱が勃発し、幕府は翌年二月末ようやくそれを鎮圧できた（原城の乱）。

幕府はこのときの苦い経験から、キリスト教禁制をいっそう強化する必要にせまられた。原城の乱のとき、出島のポルトガル人は、叛徒とはなんのかかわりも持たなかった。しかし、禁教を遂行するうえで、天主教国との交通を断絶するのが良策との判断から、幕府は寛永十五年（一六三八）八月、太田備中守を長崎にやり、出島のポルトガル人に通商禁止の命をつたえ、在住者は日を期して国外に退去するよう命じた。

翌年の夏、ポルトガル船アルメイダ号が長崎に入港したとき、幕府は井上筑後守を長崎につかわし、貿易禁止の命をあらためて伝えさせ、もしふたたび来航したばあい、船を沈め、乗組員は死刑に処する、と宣言した。ここに約一世紀にもおよんだ日葡貿易はついに終えんをむかえた。

アルメイダ号がもたらしたニュースがマカオに伝わるやポルトガル人は大いにおどろき、寛永十七年（一六四〇）五月、ポルトガル王の使節ルイス・パエス・パチュエコの一行七十四名が長崎にやって来て、通商修好の存続を請うたが、幕府はこれを断平拒絶し、船を西泊まえの海上で焼いたうえ、特使以下六十一名を六月十六日（八・三）の朝、西坂において斬罪し、のこり十三名に処刑のようすを見させたのち、乗りすてられた唐船（ジャンク）⁽¹⁰³⁾にのせてマカオに放還した（「南蛮船焼捨之事」）。

ポルトガル人が長崎を退去したことによって、それまでポルトガル船が入港するたびに通訳をつとめ、商品の取引にあずかり、売買仲介の手数料をえていたポルトガル（南蛮）通詞たちは、職をうしなつた。

幕府によって、鎖国・禁教がしかれ、ポルトガル人が日本を退去したのちも、長崎には日葡貿易時代のポルトガル通詞がまだかなりの数いたようである。ポルトガル語は、当時、極東における共通語（国際語）であり、交易においてはスペイン語と同じく絶対に欠くことのできぬものであった。

寛永十六年ごろから寛文十年ごろ（一六三九年～一六七〇）までの約三十年間、長崎にいたポルトガル通詞（通詞のことを *Jurubaca* または *Jurbassa* ⁽¹⁰⁴⁾ という、これはマレー語の *Juru-bahāsa* が訛つたもの）の名をかかげると、つぎのようになる。

西吉兵衛……………？？寛文六年（二六六六）五月十七日没。マカオのポルトガル人から「アントニオ・カルヴァロ」と呼ばれていた。ポルトガル語に熟達していたとされ、もっぱらその通訳にあたった。寛文九年（二六六九）まで長崎でつとめ、延宝元年

（二六七三）江戸に召し出され宗門改の通詞・目付となる。貞享元年（二六八一）まで同職にあった。

中村八左衛門……………？？延宝二年（二六七四）二月二十六日没。播州龍野の人。肥前平戸で南蛮通詞となり、寛永十七年（一六四〇）オランダ人とともに長崎に移り、延宝二年（一六七四）まで三十五年つとめた。

肝付伯左衛門……………？？慶安四年（二六五一）十一月十六日没。

作右衛門……………姓名および生没年不詳。中山作左衛門のことか。葡通詞もかねた。

秀島藤左衛門……………生没年不詳。ポルトガル語やオランダ語に熟達していたという。

志筑孫兵衛……………？寛文十年（一六七〇）九月十五日没。寛永二十年（一六四三）の葡船プレスケンス号事件のとき通訳をつとめ、のち江戸に在勤。

猪俣伝兵衛……………？寛文四年（一六六四）四月二日没。

沢野忠庵（焯化人）……………ポルトガル人。本名をクリストヴァウン・フェレイラという。

一五八〇？～一六五〇？（元龜二年？～慶安三年？）。イエズス会士であったが、寛永十年（一六三三）長崎において捕えられ棄教し、宗門目明しと通訳をつとめた。のち再び信仰にもどり処刑された。

加福吉左衛門……………生没年不詳。ポルトガル人が長崎から退去になるまえから、ポルトガル人の通訳をつとめたという。出島のカピタンについて江戸参府の途次、肥前の田代の宿において検使豊田五左衛門の手にかかり殺された（元禄二・一・一八）。

今村源右衛門……………初代は祖父市左衛門。源右衛門は三代目にあたる。享保十二年（一七二七）より明和八年（一七七二）まで四十五年間通詞をつとめた。イタリヤの宣教師シドッティと話すとき、ポルトガル語を用いたという。

茂七郎左衛門……………生没年不詳。蘭通詞であったが、ポルトガル語の心得があった。

西善兵衛……………生没年不詳。茂七郎左衛門とおなじように蘭通詞であったが、ポルトガル語の心得があったとされる。⁽¹⁰⁶⁾

通詞は、訳詞（司）とも称し、外国との交易をおこなうさいに通訳と商務員をかねる職とされ、長崎奉行の管轄に属していた。

ポルトガル人がまだ長崎において商業活動に従事していた元和二年（一六一六）、西吉兵衛は

〔南蛮大通詞〕

に任じられた。

平戸のオランダ人が長崎の出島に移住を命じられたのは寛永十八年（一六四一）のことだが、このとき蘭人に付き添ってきたのは、西吉兵衛・名村八左衛門・肝付伯左衛門・志築孫兵衛・猪股伝兵衛ら十一名の通詞たちであった（〔阿蘭陀着津平戸ヨリ長崎ニ被移事〕

『長崎実録大成』所収)。

このころ、長崎でポルトガル通詞として知られていたのは、西吉兵衛・名村八左衛門・猪俣伝兵衛ら三名であり、帰化人沢野忠庵も通訳のしごとにかかわった。当時、ポルトガル通詞であった者は、オランダ語をまなび、また蘭通詞であった者は、ポルトガル語を学習し、二カ国を心得るように努めたとされ、その数は約八十名という(古賀十二郎『長崎洋学史 上巻 語学』)。

正保四年(一六四七)五月、ポルトガル王ジョアン四世の使節ゴンサロ・デ・スイケイラ・デ・ソーザの一行をのせたサウン・ジョアウン号とサント・アンドレー号二隻が長崎に来航し、通商修好をもとめるとき、通訳をつとめたのは西吉兵衛、名村八左衛門、猪俣伝兵衛ら三名の通詞であった。

「もともと年上の通詞」*Jurubaca*は、アントニオ・カルヴァロであり、むかしポルトガル通詞であった⁽⁹⁷⁾というが、これは西吉兵衛のことを指している。

西吉兵衛らは、毎日のようにポルトガル人と接し、交渉にあたるのだが、ポルトガル語を用いた。

ポルトガル船の来航は、鎖国発布後はじめてのことであったので、長崎奉行所は大いにおどろくのだが、使節に渡海および通商の厳禁たることをつたえ、食糧や薪水をあたえて帰帆させた(八・六〇九・四)。

肝付伯左衛門と作右衛門(姓名不詳)は、日葡貿易の断絶とも失業のうきめを見たが、引きつづき蘭通詞として長崎で勤めることになった。しかし、秀島藤左衛門だけは、ポルトガル語やオランダ語に通じていたにもかかわらず、通詞としてとどまることができなかった。

「ポルトガル語に熟達し、オランダ語も相当にできる通詞藤左衛門ならびに話および計算のはなはだ巧なる書役伊左衛門を、すくなくとも来るべき貿易時期のあいだ留めおく許可を願ったが拒絶され、少しもこれに用ひなかつた通詞伯佐および作右衛門を通詞として引きつづき使用することを許された」(一六四一年八月十八日付の記事、村上直次郎訳『出島蘭館日誌 上巻』所収)。⁽⁹⁸⁾

寛文時代(一六六一一年〜七二年)に入っても、長崎においてはポルトガル語の研究は、かなり行なわれていたらしい。⁽⁹⁸⁾

延宝元年(一六七三)五月、イギリス東インド会社のリターン号が長崎に入港し、通商関係の復活をもとめるとき、七名の通詞が交

渉にあたった。ある通詞はポルトガル語またはオランダ語で、スペイン人またはポルトガル人の潜伏なきをたしかめた、という。が、その通詞とは加福吉左衛門であったかもしれない。

このころオランダ語よりもポルトガル語のほうがよく通じたらしい。⁽¹⁰⁾ 貞享二年（一六八五）六月、ポルトガル船サウン・パウロ号は、伊勢の度会郡神宮村の漂流民十二名をのせ長崎に渡来した。この船は漂流民の送還を口実に、じつは日葡貿易とキリスト教の布教を復活しようとしてマカオからやって来たものであった。⁽¹¹⁾

このとき船長は、ポルトガル語で書いた書簡とその中国語訳を提出した。大通詞加福吉左衛門は、ポルトガル語をもって通訳し、また長崎奉行・川口攝津守宗恒の命をポルトガル語に訳したとされる。当時、長崎にはポルトガル語の読み書きの達者な通詞がまだ大勢いた。⁽¹²⁾

伊勢の漂流民たちは、前年の八月に反帆の船に薪をつんで江戸にむかったものだが、伊勢の大山沖で嵐にあい、海をただよい、この年の一月二十六日マカオに漂着した。マカオに上陸すると、七十余歳のすこし日本語を話す老婆と会った。

同人はポルトガル人を父として生れた者であり、先年長崎よりマカオに追放になった女性であった。この老女は、いつもねんごろに通訳してくれたという（「阿媽港ヨリ伊勢之者送來事」『長崎実録大成 第七卷』所収）。

宝永五年（一七〇八）十一月、取調べのため長崎に送られてきたイタリアの宣教師、ジュアン・バプティスタ・シドッティの通訳をつとめたのは、大通詞今村源右衛門であるが、ポルトガル語を用いたがよく意が通じず、出島の助手ドウがたまたまラテン語を知っていたので、シドッティとラテン語で対話させ、⁽¹³⁾ ようやく要領をえることができた。

享保五年（一七二〇）一月、将軍吉宗が長崎に舶載される禁書の一部を解禁したことにより、オランダ語の学習が盛んになって行ったが、ポルトガル語は蘭学の隆盛とは対照的に凋落の一途をたどるようになった。

寛永十七年（一六四〇）五月に来日したポルトガル使節のばあいは、来航は日本の国法に反するということで七十四名全員を獄舎に投じ、十三名だけはくじびきによって命を助けられるといった惨劇におわった。幕府は、その後いくどか来航したポルトガル船に対して苛酷な措置をとらず、よく諭して帰帆させる手段に出ている。

貞享二年（一六八五）六月、サウン・パウロ号が来航したのをさいごに、万延元年（一八六〇）五月、ポルトガル使節イジドロ・フランシスコ・ギマランセス Izidoro Francisco Guimarães が、「ドン・ジョアン一世」号にのって品川に来航し、のち日葡修好通商仮条約を日本政府（幕府）とむすぶまで、ポルトガル船は一隻も渡来しなかった。また潜入をはかる宣教師もいなかった。だからポルトガル通詞はポルトガル語を用いたり、語学力を練磨する機会もしぜんなくなった。

しかし、この約二七〇年間にポルトガル人は一人も日本に來なかつたかというところでもない。中にはオランダ船の乗組員として來日した者もいる。たとえば『蘭館日誌』*Japan Dagregister*によると、リスボン生まれのドミニクス・ソリエン Dominicus Soljen という名の水夫は、一七六二年九月十四日（宝曆一二・七・二六）出島において亡くなり、稲佐の蘭人墓地に葬られた⁽¹⁶⁾。寛永十六年（一六三九）、ポルトガル人が日本（長崎）から追い出されてから、ポルトガル語の勢力はおとろえて行くのだが、通詞のなかには地道にその学習に励むものもいたようだ。

*

長崎の東京通事・魏五左衛門（一七五七？〜一八三四）は、寛政八年（一七九六）八月末、蘭通詞がもっていたとおもわれる写本、*Vocabulario da Lingua Portuguesa//Japan*

を借りだし浄写しおえると、それを基に「南詞襟解」と題する稿本を三冊つくった。

この稿本に最初に言及したのは、長崎の著名な郷土史家・古賀十二郎（一八七九〜一九五四）である。かれは自著『長崎洋学史 上巻 語学』（長崎文献社、昭和41・3）の「七 魏五左衛門の南詞襟解」において、みじかい解説をあたえている。

おそらくその記事に触発されたのであろう、後年国語学者の土井忠生は、「長崎通事のポルトガル語」（『言語研究』第五十四号所収）と題する「南詞襟解」に関する小論を発表し、さらにくわしく考究、分析した研究（長崎通事のポルトガル語について——『南詞雑解』と日本語）を自著『吉利支丹論』（三省堂、昭和57・4）におさめた。

その後、「南詞襟解」についての論文は現われていないようである。わたしは日本における外国語受容史のうえから、この稿本をぜひいちど見たいとおもっていたが、さきごろ長崎県立図書館で望みを果たすことができた。

稿本の作者である魏五左衛門のくわしい履歴についてはわかっていない。が、たまたま頼川君平編『訳司統譜 完』(非売品、明治30・9)を見る機会があり、そのページをめくっていたら、「東京通事」といった項があり、同人の簡単な系譜を知ることができた。

その記事によると、東京通事の元祖は、東京久蔵といい、明暦年間(一六五五年〜五七年まで)その職にとどまった。久蔵の役をひきついだのは、魏五平次であり、それは元禄十二年(一六七二)四月のことであった。

五平次が没したのち、正徳^(一七二二)二年四月、初代の魏五左衛門が跡をつぎ、さらに五平次なる者が通事の職を継承した(宝暦^(一七五七)七年)。「南詞襟解」の著者である二代目の五左衛門が東京通事の跡目をついだのは、天明元年(一七八二)十月のことである。古賀説によると、同人は天保五年(一八三四)十二月十二日よわい七十八歳で没したという。

いったい「南詞襟解」(美濃紙、袋綴し)は、どのような内容と構成をもつものなのか。

この写本は、もともと十二冊から成るものであったようだが、それを抄写して三冊にまとめたものらしい。^(註) 稿本三冊の状態は、けっしてよいものではないが、読みずらさはあっても文字の判読にさしたる困難はない。

本の大きさは、たて27 cm、よこ19.8 cmである。が、厚さは各冊により異なり、一巻が約1 cm、二巻は0.8 cm、三巻は約0.6 cmから0.7 cmである。本書は、単語と会話から成りたっており、土井説によれば、日本人がポルトガル文を読むためのものでなく、話すためのものであるという。組織(構成)上は、日葡対訳辞書もしくは会話書といふべきものという。

どの巻も単語と会話文から成っている。第一冊は単語を種類別にわけ、天地・国寄・月日につづいて、雑五般・椀^(食器の通称)・家具・住家・仕法・金銀細工・魚類・甲類・化生畜生・鳥類・虫類・端物(長いみじかい)・妙香竹木草・船・軍勢などがつづき、そのあと語言短句、ふたたび単語の数量・武家などがくる。そしてさいごの数ページは、会話でおわっている。五十一葉。

本書で用いられている漢字は、異体字や宛字がおおく、誤字もすくなくみられる。巻頭の単語は、つぎのようなものである。

- ゼイヲテイラ ゼレイステ テイラ ニイラ セルウザ クワドロ○デエントス
- 天地ト云フト ゼレイステ 天ノコト地ノコト 主ノコト 唐ノ主ノコト 四大地水風火ト云
- テンチ
- カレンタ。アリヨ 暦ノ テイヤス。ヤヤゴ ペウン イステイヨキウトウノ インヘルノ バルテデ。レスデ パルテ
- 暦ト云コト 黒日ノコト 悪日トナリ 一 春ハル 夏ナツ 秋アキ 冬フユ 一 東ノ方ト云コト 方角ト云 パルテ
- コヨミ クロヒ

また会話文には、つぎのようなものがかかっている。

- 一 生得ナトウラメシ 秋雨者アキメ 此様コト 統降トウカウ 後ノチ 必カナラシ 米コメ 者モノ 腐クサ 申マウ 二云コト
- 一 人間者ヒトノミヤコ 生得ナトウラメシ 欲ホシ 深コソク 者モノ 二云コト

ポルトガル語はすべてカタカナで表記され、語の区別(分割)を示すばあいには○が用いられている。カタカナ表記の単語のいくつかに、いまのポルトガル語をあててみよう。

- 天(ゼレイステ) / ゼンステ / ゼイヨ(ノコト) 地(テイラ) / ノコト……セレスサセウキーン celeste, ceu, terra
- 暦(カレンタ) / アリヨ / ト云フト……カレンタール calendário
- 春夏秋冬(ペウン) / イステイヨ / キウトウノ / インヘルノ ……ヴァラウン エステキ オトーン verão, estio, outono, inverno
- 東(レスデ) / ノ方(パルテ) / ト云コト……レステ パールチ leste, parte

第二冊は、天地などをくり返したのち、動詞を中心に採録し、さらに短い会話文がくる。四十七葉。いくつかおもしろそうなものを拾って、つぎにかかげてみよう。

- コンベルサ コンヘルサアル
- 一 交ルト云コト 交合ト云フト……
- マジワル
- イミタアル
- 一 インジナアル
- 一 覚ブコト 一 教ト云コト 一 智被至ト云コト
- マナブ
- ラシユル
- シラスル

一 テイセンチシニヨウラヂニエンペラドウルニスタペレイニヨ
公方様御台様ノ懐胎被成爲御座候ト云コト
クボクマ ミタイサマ クワイタイ セラレチ ゴザリマス

カタカナにあたるポルトガル語は、つぎのようなものである。

- 交ル (コンベルサ) ト云コト……………copulação
コプラサウン
- 交合 (コンヘルサアル) ト云フト……………copular
コプカール
- 覚 (イミタアル) ブコト……………imitar
イミター
- 教 (インジナアル) ト云コト……………ensinar
エンシナール
- 智被至 (アビサアル) コトト云コト……………avisar
アヴィザール

(会話文のポルトガル語表記は省略)

第三冊は、商用会話の文などをかかげたのち、人体・味智・父母兄弟などの単語がくる。三十二葉。

- ハゼケ○ゼニヤアカ
- ハゼイル○メルカン○スイヤニ云
- メルカドウル

一 商売ヲ仕ルト云コト 一 商人ノコト

ウリカイヲイタシマス アキナイスルヒト
アキンド

エンバル○カバアド エンバル

一 舟ニ荷ヲ措ト云コト 一 船ノコト

フ子ニモノヲツメ フ子ト云コト

一 貴様ニハ水ノ内ニ濟候ト古支 一 当年、何人連ニ来候ト哉ト云コト
キチマニハ○ミンノ○チエ○スミナサレ エヌア、○ララントス○リワラシレウバ○ラ、サマルセ○ロコノスイマ

商売 (メルカン) ヲ仕ル (ハゼイル) ト云コト……mercancia, fazer
メルカン、シヤ、フヤゼー

商人 (メルカドウル) ノコト……mercador
メルカドール

舟ニ荷ヲ措ト云コト (エンバルカバアド) ……embarcar
エンバルカー

船 (エンバル) ノコト……embarcação
エンバルカサウ

(会話文のポルトガル語の表記は省略)

*

江戸中期から幕末までのラテン語。

キリシタン時代、日本人信徒の多くは、ポルトガル語やラテン語にふれ、中にはそれをふかく学ぶものもいたが、禁教令が出、キリシタンが弾圧されるようになってからは、横文字に接する機会もしだいになくなり、せつかく身につけた西洋の文字についての知識は歳月の経過とともに消えて行った。そしてラテン語の学修はすっかり影を潜めてしまった。

しかし、江戸中期に入ると、蘭通詞や蘭学者および医師のなかにラテン語をすこし解する者が現われた。オランダ文の中にまじるラ

テンの単語（医薬、化学、植物用語など）を羅蘭辞典で調べ、その意味を知ろうとした。こういった科学者はラテン語と無縁でなかった。

しかし、当時ラテンの語句や文章をよむことは容易ではなく、あえてそれに挑戦することは、難事ちゅうの難事であったかとおもわれる。

鎖国下、著述においてラテン語にはじめて言及したのは、近世屈指の大学者と目される新井白石（一六五七～一七二五、江戸中期の儒学者、政治家）であろうか。白石は外国地誌『西洋紀聞（三巻）』（正徳五年＝一七一五以前の成立）において、

ラテンに至ては、此方語音に相通せずといふ所なし。されば、諸国の人、これを学びずといふものあらず、又諸国用ゆる所の字体、二ツあり。一つに、ラテンの字、二つに、イタリヤの字、其ラテンは、漢に楷書が体あるがごとく、イタリヤの字は漢に草書の体あるに似たり。……

と記し、はやくもラテン語が重要なことばの一つであることに注目している。

さらに天明八年（一七八八）の晩春、大槻玄沢（一七五七～一八二七、江戸後期の蘭学者、蘭方医）は、「蘭学階梯」（二巻）を刊行するのだが、同書の上巻（乾）の「例言」（凡例）において、「羅甸語トハ彼邦ノ雅言〔俗間のことば〕ニテ乃古語ナリ」と説いている。

渡辺華山（一七九三～一八四一、江戸後期の思想家）は、天保十年（一八三九）三月末に兵学者・江川太郎左衛門の依頼をうけて執筆した「外国事情書」において、ヨーロッパのラテン語学校（古典語教育を重視する中等学校）に言及し、

「羅甸〔コルレギーン〕ト申、「ラテン」「ギリツシア」ト申古語及ビ諸国ノ語ヲ学ビ候。其学凡六科有之由」と記している。

また山村才助〔昌永〕（一七七〇～一八〇七、江戸後期の洋学者）は、『西洋雜記』（幕末に刊本となる）において、ヨーロッパ諸国の祖語としてのラテン語にふれ、

「歐羅巴洲中諸国其言語ノ原始およ凡ソ三種アリ第一ハ「ラテン」意大里亞ノ中ニアリ旧都ノ名也語也コレ意大里亞、拂朗察、伊斯把儂亞等諸国ノ言語由テ出ル処ナリ」と述べ、

「海ヲ「ラテン」語ニテ「マレ」トイフ拂朗察ニテハ「メル」ト云ヒ伊斯把儂亞ニテハ「マル」ト云フ」としるしている。

*

ラテン語ではじめて詩を書いた日本人。

十七世紀初頭にマニラにおいてラテン語で詩をかいた日本人司祭がいたことを原田裕司氏の論著『キリシタン司祭後藤ミゲルのラテン語の詩とその印刷者税所ミゲルをめぐって』（近代文芸社）によって知り、ひじょうに興味をおぼえた。そのラテン語の詩の作者についてはじめてふれたのは、東洋史学者の石田幹之助（一八九一〜一九七四）である。

かれは大正十五年（一九二六）に「南蛮雜鈔」（『新小説七月 南蛮紅毛号』所収）と題する小記事を發表し、その中で十七世紀初頭（元和年間）にフィリピンで刊行された二種類の稀書について言及した。もっともその記事は、原物を見て書いたというより、海外の書目によって紹介したものらしい。そのうちの一冊が、石田のいうレナタの『菲島雕版源流攷』（W. E. Retana: *Origines de la Imprenta Filipino*, 1911）であるが、「第二三ページに日本人 D. Miguel Goto（後藤）といふ坊さんの拉丁語の詩が載せてあるといふことを申し添へておきます」と語っている。

ミゲル・ゴトーとは、いかなる人物だったのであろうか。この司祭は、日本名を後藤了順りょうじゆんといい、長崎の富裕な商人・後藤宗印むつしげい（生年不詳、元龜二年（一五七二）長崎開港当時、地頭、キリシタン）の次男として長崎で生まれたが、生没年については明らかでない。

十歳前後から十年間、八良尾・有家・長崎の各神学校せみナリで教育をうけるのだが、この間にラテン語をみっちり修めたようである。ラテン語の最上級になると、ラテン語による詩作法も授業の一環として教えられ、またラテン語で演説や討論や芝居まで行なった。いまのわれわれの感覚からすれば、ラテン語で詩作することは至難の技であるが、当時の神学生の中には、卓越した語学力をもった者もい

たようだ。

慶長十九年（一六一四）国外に追放され、マニラに渡り、元和四年（一六一八）司祭に叙階され、教区司祭として帰国した。寛永十年（一六三三）ごろ棄教し、沢野忠庵（ポルトガル人のクリストヴァウン・フェレイラ）とともにキリシタン目明しとなった。が、この転びバテレンはいつ亡くなったものか定かでない。原田説によると、慶安四年（一六五二）から万治元年（一六五八）の間ではないかという。

シゲル・ゴトローがラテン語で書いた寸詩は、つぎのようなものである。

IN COM mendationem Libri,

Epigramma.

De D. Miguel Goto Xapon Sacerdote.

Aurealux véluti caecae, fulgóre, tenébras

Pellit, & alma, suo, cuncta, colóre fovet:

Sic liber hic mentes caligine liberat atra,

Ignemque divino frigida corda movet.

Ergo age gens Illoca, cupis si cernere lúcem

Et tépidum flammis úrere pectus aves;

Si capis, hunc legito noctesque, diesque li-

bellum :

Hic tibi perpétuo lux érit, ignis érit.

この書を推奨する

寸詩

日本人司祭ミゲル・ゴトー師作

金色の陽光がその輝によって真っ黒な闇を追い払い

優しく万物をその熱で暖めるように、

この書物は人々の心を黒い霧から解き放ち

神々しい火によって凍えた心を動かしめる。

ゆえにイロコの人々よ、もし汝らが光を見たいと望み

冷めかけた胸を炎で燃え上がらせようと願うなら、

この書を手に取り昼夜を分かたず読むがよい。

これこそ汝らにとって永遠の光となり火となるであろう。

原田裕司訳

正保二年（一六四四）長崎の西勝寺（一向宗、京都西本願寺末寺）において、ころびキリシタンとなった九介夫婦の棄教に立ちあつたのは、キリシタン目明しの忠庵と（後藤）了順、了伯ら三名であった。このときキリシタンの用語（十四語）を書きつけたものが奉行所に宛てて提出されている。それにはポルトガル語、フランス語、ラテン語、ギリシャ語などが添えてある。おそらく、外国語を書き入れたのは忠庵であろう。つきにその単語をいくつかかかってみよう。

Portug.	Fr.	Lat.	Gr.
きりしたん	Christão	—	—

伴天連	Padre	—	Patres
みんへるの	inferno	enfer	inferna
じうす	Deus	dieu	deus
あんしよ	Anjo	Ange	—
			θεος θεος
			αυελος
			(三)

*

ラテン文の翻訳に挑戦した蘭学者。

安永八年（一七七九）の春、前野良沢（一七三〇〜一八〇三、江戸後期の蘭医）は、第十代将軍家治の命をうけて、出島の商館長からの献上品であろうと考えられている西洋の寓意画集（フランス製の銅版画、書名不詳）に添えてある画賛（余白の説明文）の翻訳をどうにかおえた。

〔西洋畫賛譯文稿〕⁽¹⁹⁾

と題するものがそれである。

しかし、その文章はオランダ文ではなく、ラテン語で書かれた寓言（たとえ話）であり、画図によって子供たちに文章を理解させるものであった。

もとより良沢は、蘭文はよめてもラテン語を習ったこともなければ、読んだこともない。が、君命を固辞することはできないので、辞引をひきながらそのラテン文を読破するしかなかった。ときに良沢五十七歳であった。

「題言」（巻頭のことば）において、年をとってからの独学、「まだよくその彷彿をうかがう能はざるなり」と嘆ぜられた。「いま君命固辞すべからざるをもって勉めてその訓義（文字のよみと意義）を尋ねあぐむ」などと、苦心のほどを述懐している。

唯恨衰晩獨學未能窺其彷彿者也。今也以君命不可固辭。力尋其訓。浚搜其義。

良沢の苦心のラテン文の和訳はどのようなものであったのか、いくつか例を引いて参考に供しよう。
巻頭は、つぎのような文章ではじまっている。

西洋畫贊譯文稿

前野源喜謹訳

○四字句

Surde scit sonitus ad petras e gurgite piscis,
シユルヂ スシト ソニチユス アド ペトラス エ ギユルジテ ピスシス
Ascendis mille capitur molimine in undis
アスセンヂス ミルレ カピチュル モリミネ イン ウンヂス

此贊文(絵の説明文)は韻語(韻をふんだことは)を用る者にして、是詩の類なり。則言外の意味ありて淺見(淺はかな考え)を以て叨(たう)これが説を為べからず。故に姑く韻語を用て其譯を録して其篇を具へ、以て博雅(博雅)の明辯(明辯)はつきり區別するを俟つ。

敢て支那の詩の躰に擬すると云者には非るなり。附て曰、此畫面羸躰の者あり、而詩中の語これに及ぶ者なし。吾私かに考る所あり。然ども譯文に關らざるを以てこれを茲に記さず。

讀法

シユルヂ スシト ソニチユス アド ペトラス エ ギユルジテ ピスシス
アスセンヂス ミルレ カピチュル モリミネ イン ウンヂス

凡讀法の中、音釋と同じからざる者あり。是は其單音と言韻とに在て異同(ちがった点)あるが爲なり。ミルレとシツレとの如きはなり。下に多く此に類する者あり。須くこの語の轉音(一語がいっしょになり複合語をつくるとき、音が転じ変わる)を推てこれを知るべし

このあとラテン文の翻訳がくるのだが、それはつぎのようなものである。

釈言

シユルデは聞へ難きなり、スシトは幽微(奥深く、かすかで知りにくい)、ソニチユスは聲なり、ペトラスは大石なり、ギユルジテは水中の窟(ほらあな)なり、ピスシスは魚なり、アスセンヂスは升るなり、ミツレは多数なり、カピチユルは漁者なり、モリミネは難し得なり、ウンヂスは潭(水が深くよどんでいる所)なり、アド、エ、インは皆助辭(前置詞、後置詞、助動詞など)なり。

凡助辭は支那の助辭と其用俾しからざる者あるを以て、譯する所の字を註し難き者多し、故に皆其釋言を略す。

「原文の意味」 魚は水中より岩上の音を聴き取ること幽かなり、浮び出づれば、水中に於ける柔かき働により(網又は釣系のこと?) 捕らへらる。

田中秀央 訳

このあと「切意」(漢訳)と解説文がくるが、漢訳のみをつぎにかかげてみよう。

瞻彼澗潭 漁者施罾 難哉難哉 水底之窟 擊石于隩 其聲孔韻 於物魚躍 水面之瀾

○裏一九字号

Sic	truculentus	aper	meditatus	semita	in	ira,
シク	トリユキユレンヂユス	アペル	メヂタクチユス	セミタク	イン	イラ
Vel	canibus	capitur,	vel	prona	mergitur	unda.
ヘル	カニナス	カピチユル	ヘル	プロナ	メルジヂユル	ウンダ

読法

シク	トリユクレンチユス	アベル	メヂタチユス	セミタ	イン	イラ	ヘル	カニブス	カピチユル	ヘル	ブ
ロナ	メルジチユル	ウンダ									

釈言

トリユクレンチユスは獵(あらいぬ)なり、アベルは野猪(いのしし)なり、メヂタチユスは逐(お)ふなり、セミタは狭路(せまぢ)なり、イラは勁暴(けいぼう)強くて荒々しい)、カニブスは田犬(でんけん)なり、カピチユルは獵犬なり、メルジチユルは没落(ぼつらく)なり、ウンダは深水(ふかみづ)なり、シク、イン、ヘル、ブロナは皆助辭なり。

〔原文の意味〕いと猛き野猪は激怒し小道に立止れるが、彼は或は犬達に捕へられ或は前面の水中に没する。 田中秀央訳

此文詩なり。上の例に依てこれを訳す。

切意

獵野猪 即暴即勁 獵者放盧 驅入藩徑 盧從獵者 猪没陷弄

私に按ずるに(おもうに)此畫中、土牆(土手)の上に挺蕪(さいふ)の如きものあり。和蘭の語に、これをフランスタスと稱す。タスとはかみいれを云なり。是フランス人の用る所の物なるを以てこの號(よびな)あり。且此餘の畫中印度の人を除て、皆フランスの人物なり。然れば此畫贊初はフランスにて製すること益知るべしとす。

注・()内は、引用者による。

良沢のラテン語の発音法や訳文について検討してみよう。古典ラテン語の発音がどのように行なわれたかについては確言できないが、例外をのぞき、日本語のローマ字を読むように行ってよいとされる。

しかし、良沢の発音は独特なもので、あまりいただけない。たとえば、○四字号の冒頭の文 *Surde scit sonitus……* は「シユルデ スィト ソニチユス」と読んでいるが、「スルデ スキット ソニトウス」と読むのが穏当なところであろう。

また訳文をみると、原文を文意が通るように訳したのではなく、個々の単語の意味を説明したにすぎないことがわかる。まるで判じ物をとくように読んで行った印象をうける。どの「釈言」(文の解釈)も原文全体のいみを伝えておらず、漢訳もかならずしも正しいものといえない。

良沢の試みは成功したといえないが、難解なラテン文にけなげにもいどんで行った勇氣と努力は十分たたえられてよい。

また蘭通詞の吉雄幸作(一七二四〜一八〇〇)と志築忠雄(一七六〇〜一八〇六)は、大いなる困難にもひるむことなくラテン語の研究をつづけた。吉雄は享保十年(一七二五)発行の『羅句和蘭辞書』によってラテン語を研究し、志築はエンゲルベルト・ケンペルの『日本とシャム史』(初版は一七二八年に原稿より英訳され、のち各国語に訳された)の日本史篇をオランダ語訳から抄訳し、「鎖国論」と題して文化五年(一八〇八)に刊行した。が、その中に出てくるラテン語をよく反訳したとされる。^(註)

*

宇田川榕庵(一七九八〜一八四六、江戸後期の蘭学者)は、本草や舎密(化学)の分野において活躍し、名をなした学者だが、語学の才にもめぐまれ、オランダ語のほか、英・独・露・ラテン語にまで手をだした。

かれのラテン語学習の痕跡をのこす和とじの小冊子(稿本)が、いま早稲田大学中央図書館に貴重図書として現存する。

「羅句語解」

と題するものがそれである。

この稿本の大きさは、たて23.3 cm、よこ17 cm。厚さは0.7 cmである。表紙の色は、うす茶色であり、うら表紙のところどころに虫くいが

みられる。

表紙の綴じあわせ部分(右はし)に、

文政七^{きさ}猴年十月十一日

阿^{かち}凍集録

宇田川榕

㊦

と毛筆でしるされている。

この文は、文政七年猴年十月十一日(一八二四・一二・一)にラテン語の語いの採録をおえ、欄^{かくり}筆したという意味である。

阿^{かち}凍とあるから、寒さでかじかんだ手のゆびに、あたたかな息を吹きかけながら、ようやく筆を擱くことができたということであらう。

本文は美濃紙で三十八葉あり、和紙の野紙に墨と朱墨を用いてラテン語の化学・薬学・医学の単語をABC順に配列し、その語句に対応する訳語をしめしている。

「羅^{ラテン}旬語解」とは、「ラテン語の解釈」の意であるが、じっさいはラテン語の科学小辞典もしくは語彙集とでもいえそうなものである。収録されている単語の数は、約七〇〇語^(四)という。ラテン語は、すべて筆記体であり、縦によこ書きされ、訳語(漢字とカタカナまじり)はたて書きである。

たとえば巻頭のページは、つぎのようになっている。

訳例

クールタランキ 揮発ナル

Tulapium Volatile.

取^レ
Px.

塩 揮發 角 鹿 弓 半
Sal: volat. Corn. cervi únc * B

水 泉 比 三
Aq: Fontam. lib * iij.

水 劑名 弓 三
Alexeter. Spirit. únc iij

砂糖 白 弓 二 調合
Sacchar. alb. únc. ij misce. *

このあとつぎのような本文がくる。

近世此号ヲ用フニ

I I
ana. a. aa. 空Oaaa. amalyama
Verwikking. *

ad 至

Aad. — (adde) 尚加^レ 消化スル
adest 加^ル
addits

ac 其時 醋
acetum *

adynamiques. krachtlooze * 混交
admixtionem . op admixce.

acquirid,	得ル ヌ 為シ遂ル	
actis	卷ス	A. B. arenae balneum *
agiland	攪動	Adm.—adomi
agitans	同上	
agrest. *	adille	

注・*は引用者がつけたもの。あとの(注)を見よ。

巻頭の「訳例」の意味は不明である。このあとにつづく本文の中で、例語にたいするオランダ語の単語をいくつかかかかっているが、理解の一助とするためであろう。わが国のページは、つぎのようになっている。

Vaporis	湯ノ蒸気	
Vase.	器	
Vas	同	
Vasis	同	
Valdc.	甚々極テ	V. B. タムブメント

Vel.	或	
Vesum	ワールヘイド	
Vegetabire	植物ノ	
Vegetatie	補益スベキ、強仕 ニスベキ	
Vertas.	棄ル	Volatile 蒸餾
Vitseo.	硝子	
Vitreume	同	
Vitreat	同	
Vitell.	雞子黄	
Viginti	二十	
Virent.	新鮮	
Vinosús	葡萄酒ヲ加フ	
Viridibus	綠色	
Vino, Vini	葡萄酒	
Vin, adúst.		蒸餾 シタル 燒酒
		V. 燒酒

(注)

unc は、uncus (鉤形に曲がった) の意のラテン語か。

lib は、ラテン語の libra (重量単位) のことか。

misc は、混合せよ、の意。

verwikkling は、元氣づける、なぐさめる、の意のオランダ語。

acetum は、酢、の意。

krachtlooze は、無力な、の意のオランダ語。

balneum は、浴室、浴槽、の意。

agrest は、野生の、の意。

榕庵の「羅旬語解」に類した、ラテン語のみの対訳語彙集『ラヂン語』と題する小冊子(墨書二十六葉、和とじ)が、京都大学文学部図書館に架蔵されているという。⁽¹²⁾ おもに舎密や薬物学に関係した語彙が中心であり、幕末の成立になるものらしい。未見。

幕末期、蘭通詞のなかにラテン語を独習していた者がいた。嘉永元年(一八四八)六月、蝦夷(北海道)の利尻島に単身上陸して捕えられたアメリカの捕鯨船員ラナルド・マクドナルド(一八二四〜九四)は、同年十月長崎に移送された。

かれは翌年四月、アメリカ軍艦プレブル号で本国に帰還するまで長崎で約七カ月すごすのであるが、この間に崇福寺の末寺・大悲庵で蘭通詞たち十数名に英語をおしえた。

学生の中にはのちにペリー提督との折衝のさいに通訳をつとめた森山多吉郎(一八二〇〜七二)がいた。森山は語学の学習にひじょうに熱心であり、おどろくほど敏速な修得能力をしめしたといひ、学生の中でもひとときわ目立っていた。

あるときマクドナルドは、森山がラテン語の文法書を読みふけていることに気づいた。マクドナルドが、

——これまで外国に行ったことがありますか。

と尋ねると、

——いや、ない。けれど家には広い書齋があり、ラテン語とフランス語を勉強している。⁽¹²³⁾

と答えた。

おそらく森山は、授業や公務の合い間に、秘かにラテン語やフランス語を自習していたのであろう。

神田孝平^(たかひら)（一八三〇〜九八、明治期の啓蒙的官僚学者、男爵）は、文久年間蕃書調所に出仕していたころ、ヤン・バステイアン・クリステマイエル（一七九四〜一八七二、オランダの著述家）の短篇「体刑の物語の重要な場面」を「ヨンケル・ファン・ロドレイキ一件」（稿本『和蘭美政録』に収録）と題して訳した。この作品は、帰省の途中、大学生がある田舎の宿に泊ったときに殺される物語である。

この物語の中には、*rector magnificus*（学長）といったラテン語が出てくるが、神田はこれを「諸教頭（ここでは大学教授たち意）の長」と、ほぼ正確に訳していることである。この一事をもっとしても、幕末期の洋学者の語学力の一端を知ることができる。

*

幕末に輸入されたポルトガル語およびラテン語の語学書。

長崎に来航する外国船が、ヨーロッパの学術や耶蘇教（キリスト教）に関係した書物（多くは漢訳）の舶載を禁じられたのは、寛永七年（一六三〇）のことであった。しかし、享保五年（一七二〇）一月、將軍吉宗のとき、キリスト教以外の中国重訳の西洋の算数に
関する書物は解禁となった。寛永七年に「禁書令」を布告してから九十年目のことである。⁽¹²⁴⁾

これが洋学勃興のいとぐちとなり、幕府は外国書を輸入し売買することを黙認するようになった。⁽¹²⁵⁾

だが、これは漢書のことであり、洋書（おもに蘭書）が商品として日本に舶載されたのは寛政以後⁽¹²⁶⁾（一七八九年〜）のことである。文化・文政・天保から幕末（一八〇四〜六〇年代）にかけて、わが国に舶載された洋書（蘭書）の数は、数千部、一万冊をこえる⁽¹²⁷⁾と推定されている。

寛永十八年（一六四二）から寛政十二年（一八〇〇）ごろまでは、學術書の輸入はさほど多くなく、もっぱら通詞のための輸入であった。しかし、開国後は、長崎や神奈川（横浜） 相当な数量の洋書が入ってきた。輸入本は、各運上所で洋書改方の吟味をへたのち「改印」（長崎東衛官許）や「神奈川会所改」をうけ、のち江戸の長崎屋を通じて販売されるのがふつうだった。

ポルトガル語の書籍については、鎖国下（寛永十六年（一六三九）から安政元年（一八五四））日本にそれが舶載されることはなかったが、幕府の紅葉山文庫には、オランダ渡来のポルトガル語の辞書が架蔵されていたようだ。

近藤重蔵（一七七二〜一八二九、江戸後期の探検家、旗本）が、幕府の書物奉行に任じられたのは文化五年（一八〇八）のことだが、同人が著わした「好書故事」（巻七十九）にポルトガル語の辞典にふれたくだりがある。

ポルトガル
波爾杜瓦史國訳辞書 一冊

原名 ホルゲース、ウョールデンブック

和蘭国アブラ、ハム、アレウエイン、並ヨハンネス、コルン、同撰、千七百十四年 我正徳四年
甲午ニ当ル アムス

テルダム、ニ於テ刊行ス西洋書目

開国後はわずかながらポルトガル語関連の書物も輸入された。たとえば蕃書調所の蔵本のなかには、つぎのようなものが見られる。

J. A. Goncalves: Dicionario Portugez • China. Macao. 1813

ジョータ・アー・ゴンカルヴェス『洋漢合辞彙』、一八一三年パリ刊。

本の大きさは、19.5 cm × 15.5 cm。厚さは6.5 cm。本文は八七一頁。本の状態はわるく、ボロボロである。

J. A. Goncalves: Dicionario China-Portugues, Macao, 1833

ジョータ・アー・コンカルヴェス『洋漢合辞彙』一八三三年マカオ刊。
本の大きさは、20 cm×15 cm。厚さは7 cm。本文は一〇二八頁。本の状態は前者とおなじように悪く、ボロボロである。

Francisco Solano Constancio: Grammatica analytica da lingua Portuqueza. Paris, 1855

フランシスコ・ソラノ・コンスタンシオ『ポルトガル語の分析的文法』一八五五年パリ刊。
本の大きさは、18 cm×11 cm。厚さは23 cm。本文は二四八頁。本の状態はよい。

Anthony Vieyra: A Dictionary of the English and Portuguese Languages, in two parts: English and Portuguese and English, Lisbon, printed for the Rolland, 1860

アントニー・ヴィエラ『英葡辞典』(上巻)『葡英辞典』(下巻)、一八六〇年リスボン刊。
本の大きさは、(上巻) 22.3 cm×16.5 cm。厚さは4 cm。(下巻) 22.3 cm×16 cm。厚さは4.5 cm。各巻のページ数は不詳。本の状態はよい。

José da Fonseca: Novo dicionario Francez-Portuguez
Pariz, em Caza de V^oJ.-P. Aillaud, Monlon E C^o 1861

ジョゼー・ダ・フォンセ『新仏蘭辞典』一八六一年パリ刊。
本の大きさは、20.5 cm×14 cm。厚さは5.3 cm。本文は九五五頁。本の状態はわるく、表紙はいまにもとれそうである。

このように江戸末期に将来されたポルトガル語関係の語学書のうち現存するのは、五指ほどにすぎない。つぎに明治期以後、わが国で刊行された語学書について述べてみよう。

国立国会図書館の蔵本をいちばん古い順にかかけると、つぎのようになる。

金沢一郎編『Conversação Portuguez-Japonez ほんとかる 語会話』(大日本図書株式会社、明治41・4)

これは洋装本である。本の大きさは、15.3 cm×10 cm。本文は八六頁。ポルトガル会話の本である。はじめに語彙(日常語)が来、ついで慣用句や会話文がくる。

東洋移民合資会社編『Vocabulario e Conversação de Portuguez e Japonez 伯刺西爾会話編』(秀英社、大正3・1)

これは洋装本である。本の大きさは、12.5 cm×9 cm。本文は六四頁。小冊子である。

海外興業株式会社編『ブラジル用語手ほどき 附 会話 単語』(邦文社、大正12・3)。

これは洋装本である。本の大きさは、15 cm×11 cm。本文は一一一頁。ポルトガル(ブラジル)語の実用会話書である。

星 誠著『葡萄牙語四週間』(大学書林、昭和9・5)

これは本邦初のポルトガル語入門書か。

友田金三著『標準ブラジル語』発音 会話 文法』(カニヤ書店、昭和12・1)。

「はしがき」によると、ブラジルの国語であるポルトガル語は、ポルトガル国のもとはかなり違ったものであるという。著者によると、同書は、ブラジルのポルトガル語の発音・文法・会話・訳読など、経験にもとづいて正確かつ平易に説いたものという。

大武和三郎編『Novo Dicionario Portuguez. Japonez 葡和新辞典』(刊行年不詳)。

これは日本ではじめて刊行された本格的なポルトガル語・日本語辞典である。

編者の大武は在野のひとであり、十五年かけて単独でこの辞典を編んだ。ブラジルで七年間暮らし、明治三〇年(一八九七)に帰国すると、ブラジル公使館に通訳として勤務し、公務をおえたのち、私生活を犠牲にしてこの辞典の編纂に打ちこんだ。

本の大きさは、13 cm × 11 cm。本文は一二二六頁。収録されている語彙数は、約五〇〇〇〇。のち日本出版貿易株式会社からおなじ書名で再刊された(昭和44・1)。

星 誠編『最新葡和辞典』(日伯文化協会、昭和30・5)

「序」によると、ポルトガル語に関する辞書や学習書はきわめて少なく、書店を捜しても得られない現状にかんがみ、いつもポケットに入れて歩ける小型の見よい、引きよい辞典を提供したい意図のもとに編んだという。

本の大きさは、14.5 cm × 10.5 cm。本文は四〇四頁。小型の辞典である。収録されている語彙数は、一八〇〇〇。

海本徹雄著『实用ブラジル語会話』(大学書林、昭和34・3)

星 誠編『最新和葡辞典』（日伯文化協会、昭和35・8）

これは日本で最初の日本語・ポルトガル辞典か。本の大きさは、14 cm×8 cm。本文は一一八四頁。小型辞典である。収録語彙数については明らかでない。

『日葡辞書 Vocablario da Lingoa de Iapam』（岩波書店、昭和35・12）。

同書は、一六〇三年（慶長八年）長崎のコレジオで刷った日葡辞書（オクスフォード大学ボードリアン図書館蔵）を原本の五分の三の大きさに複製したものである。昭和三十六年三月、同辞典の「難読語表」（岩波書店）が刊行された。

どういうわけかポルトガル語関連の語学書の刊行は、こんにち盛況を呈している。つぎにその主なものをかかってみよう。

浜口乃二雄編『ポルトガル語常用六〇〇〇語』（大学書林、昭和36・6）

星 誠著『ポルトガル語四週間』（大学書林、昭和36・10）

佐野泰彦著『基礎ポルトガル語』（大学書林、昭和37・3）

国沢慶一編『図解 ポルトガル語会話』（海文堂、昭和37・6）

野田良治編『日葡辞典・第一巻ASK』（有斐閣、昭和38・4）

佐野泰彦著『英語対照ブラジル語会話』（大学書林、昭和44・11）

浜口乃二雄編『ポルトガル語小辞典』（大学書林、昭和45・8）

宮野幹男 高橋都彦 共著『標準ジラポルトガル会話』（泉社、昭和53・5）。

土井忠生 森田武 編訳『邦訳 日葡辞書』（岩波書店、昭和55・5）。

長南 夷

これは前掲『日葡辞書』の全訳である。

- 佐野泰彦編『カナ発音 葡和小辞典』(大学書林、昭和57・7)
- 吉野菊生編『ポルトガル語分類語彙』(大学書林、昭和58・4)
- 田所清克編『ポルトガル語分科語彙』(大学書林、昭和58・4)
- 佐野泰彦著『海外旅行ポケットブラジル語会話』(大学書林、昭和58・5)
- 吉野菊生共著『ポルトガル語基本構文二五〇例』(大学書林、昭和59・8)
- 田所清克共著『ポルトガル語基本構文二五〇例』(大学書林、昭和59・8)
- 宮野幹男
レオ・K・ヒラマツ 共著『役に立つポルトガル語会話』(大学書林、昭和60・4)
- 坂根 茂
日向ノエミア 共著『ローマ字ポ和辞典』(柏書房、昭和60・10)
- 宮野幹雄共著『ポルトガル語動詞の知識と活用』(大学書林、昭和62・4)
- 住田育法共著『ポルトガル語文法の諸相』(大学書林、昭和62・5)
- 池上岑夫著『ポルトガル語文法の諸相』(大学書林、昭和62・5)
- 林田雅至著『入門やさしいポルトガル語(ブラジル語)』(南雲堂、昭和62・6)
- 宮野幹男
レオ・K・ヒラマツ 共著『役に立つブラジルポルトガル語スピーチ集』(大学書林、昭和62・11)
- 富野幹男著『スペイン語からポルトガル語へ』(大学書林、平成元・3)
- 富野幹男著『ポルトガル語会話練習帳』(大学書林、平成元・9)
- 宮野幹男
レオ・K・ヒラマツ 共著『ポルトガル語ことわざ用法辞典』(大学書林、平成2・9)
- 浜口乃二雄著『ポルトガル語基礎一五〇〇語』(平成2・12)
- 佐野泰彦編『英語から学ぶポルトガル語会話』(創拓社、平成3・4)
- ジュラルド・ルーシオ・マルケス著『すぐ話せる! ブラジルポルトガル語』(UKOM Inc、平成3・6)
- 日向ノエミア編『ローマ字和辞典』(柏書房、平成4・3)
- 田所清克共編『らくらくポルトガル(ブラジル)語 文法から会話』(国際語学社、平成4・6)
- 平井正明共編『らくらくポルトガル(ブラジル)語 文法から会話』(国際語学社、平成4・6)
- 池上岑夫著『英語対照ブラジル語会話』(大学書林、平成5・4)

- 田所清克 共著 『ポルトガル長文読解教室』 (国際語学社、平成5・4)
 平井正朗 共著 『ポルトガル長文読解教室』 (国際語学社、平成5・4)
 国際コミュニケーション編 『トラベル ポルトガル語会話』 (拓伸出版社、平成5・4)
 石田エルザ 共著 『仕事に役立つブラジルポルトガル語』 (大学書林、平成5・6)
 神保充美 共著 『仕事に役立つブラジルポルトガル語』 (大学書林、平成5・6)
 弥永史郎著 『ポルトガル語手紙の書き方』 (大学書林、平成5・8)
 田所清克著 『ポルトガルブラジル語会話―日常のコミュニケーション』 (国際語学社、平成5・9)
 国際コミュニケーション研究所
 ロバート・ヒロシ・千代田 『日常ポルトガル会話』 (伯伸出版社、平成5・11)
 深沢暁著 『初級ブラジルポルトガル語』 (東洋書店、平成6・4)
 深沢暁 共著 『ベーシックブラジルポルトガル語』 (東洋書店、平成6・4)
 上田郁香 共著 『ベーシックブラジルポルトガル語』 (大学書林、平成6・10)
 日向ノエミア著 『ブラジル語でコミュニケーション』 (大学書林、平成6・10)
 池上岑夫著 『基礎ポルトガル語』 (大学書林、平成6・12)
 海本徹雄著 『実用ブラジル語会話』 (大学書林、平成7・3)
 島幸子著 『トラベルブラジルポルトガル会話手帳』 (株式会社語研、平成7・5)
 『ポルトガル語緊急医療 Guia Médico de Emergência』 (柏書房、平成7・10)
 池上岑夫
 金七紀男
 高橋都彦
 宮野幹雄 共編 『現代ポルトガル語辞典』 (白水社、平成8・2)
 黒沢直俊著 『キックオフノ ブラジルポルトガル語』 (大修館書店、平成8・5)
 S.Maria
 深沢暁 共著 『ベーシック ブラジルポルトガル語』 (東洋書店、平成8・7)
 上田郁香
 高橋都彦著 『ポケットポルトガル語入門』 (伯伸出版社、平成8・9)
 Helena H. Toida
 Manro Neves Jr. 共著 『こうすれば話せるブラジルポルトガル語』 (朝日出版社、平成9・5)
 大野隆雄
 満留久美子著 『ポルトガル語分類単語集』 (大学書林、平成9・8)

- 土井洋著『CD付き暮らしと仕事の会話集ブラジルポルトガル語』(ナツ社、平成9)
- 長島幸子著『ブラジルポルトガル語会話「決まり文句」六〇〇』(株式会社語研、平成10・1)
- 大塚光信解説『エヴォラ本日葡辞書』(清文堂出版株式会社、平成10・1)
- 飛田良文^{ジヤイメ・コエリョ} 編著『現代日葡辞典』(小学館、平成10・1)
- 黒沢直俊著『二五〇語のできるやさしいブラジルポルトガル語』(白水社、平成10・6)
- 黒沢直俊著『やさしいブラジルポルトガル語』(泉社、平成10・6)
- 日本一ブラジル「ことば」研究室編著『ローマ字で引く日本語→ブラジル・ポルトガル辞典』(株式会社ナツメ社、平成10・12)
- 京都大学文学部国語学
国文学研究室編 『ヴァチカン図書館蔵 葡日辞典』(臨川書店、平成11・11)
- 森征一 共著『ポ日法律用語集』(有斐閣、平成12・4)
- 二宮正人 共著『ブラジル・ポルトガル語早わかり』(三修社、平成12・8)
- 伊藤清克
伊藤奈希砂 共著『ブラジル・ポルトガル語入門』(三省堂、平成13・1)
- 武田千香著『ブラジルのポルトガル語入門』(三省堂、平成13・1)
- 河野彰著『NHKブラジル・ポルトガル語入門』(日本放送出版協会、平成13・2)
- 香川正子著『今すぐ話せるブラジルポルトガル語』(株式会社ナガセ、平成12・9)
- 池上岑夫著『ポルトガル語とガリシア語』(大学書林、平成13・3)

*

つぎに幕末に舶載されたラテン語の語学書についてのべてみたい。

ラテン語に関する古い書目については、近藤重蔵の「好書故事」(巻七十九)に、つぎのようにある。

原名 ジクシ、オンナリウム、テウトニコ、ラチニユム、ノヒユム
ラテン（ト添書アリ）。

和蘭医科ヨハンネス、デ、ウヰルデ撰、千七百十九年^{享保四年}刊行

羅句釈辞典

原名

和蘭国サンウルピチスコ撰 采覧異言増訳引用書
目以下略云増訳引書

守重按ニ西書略目ニハンノットウヲールデン

ブックニ卷アリト云羅句語ノ辞書ナリト是ト

異同イカン

これらは羅蘭の対訳辞書であつたとおもえるが、原書名についてはつまびらかでない。しかし、羅蘭辞典の古版が幕末期、江戸城の文庫に架蔵されていたと思うと原本にかぎらない興味をおぼえる。

ちなみに蕃書調所のラテン語関連の旧蔵本は、つぎのようなものである。

Christian Joseph de Guignes: Dictionnaire Chinois, Français et Latin, publié d'après l'ordre de Sa Majesté L'Empereur et Roi
Napoléon le Grand, Paris de l'Imprimerie Impériale. M. DCC. XIII

クリステイアン・ジョゼフ・ド・ギニユ編『中国語・フランス語・ラテン語辞典』一八一三年パリ刊。

この辞典は、ナポレオン一世（一七六九～一八二一）の勅命によりC・J・ド・ギニユが編んだもので、漢字にフランス語訳とラテン語訳をつけたものである。原著は、十七世紀末に中国で布教に従事していたイタリアの宣教師バジリオ・デ・ジェモーナがつくった『漢、HAN字、TSE西、SY訳、Y』という中国語とラテン語の辞書という。

（上）（下）の二巻本からなり、上・下巻の大きさは、共に27 cm × 18.5 cmである。上巻は五六一頁。下巻は五四六頁ある。この辞典はいま葵文庫（静岡県立中央図書館）におさまっているが、状態が悪いため公開していない。

E. Kaercher: *Latijnse-Nederduitsch, Nederduitsch-Latijnse Woordenboek, naar het Hoogduitsch E. Kaercher Leyden, 's Gravenhage, Amsterdam em Zutphen, hij S. en J. Luchtmans, 1833*

E・ケルヒャー編『羅蘭・蘭羅辞典』、一八三三年刊。

本の大きさは、23.5 cm × 14 cm。厚さは約4.5 cm。本文は一三八頁。現在、沼津市立駿河図書館の所蔵に帰しているが、本の状態はひどく、表紙を欠いている。

佐賀藩も幕末にオランダの学術書を少なからず購入しているが、その中に

廿六 一 ベコノブテ、ラテインセ、スブラークキユンスト、オフ、ガラムマチカ、フォール、デ、スコール

羅蘭文法書

千八百三十九年

一冊

ウ、イ、クレウツ、レグレイトネル

というものがある。この欧文タイトルは、おそらく

《Beknopt Latijnsche (または Latijnsche) Spraakkunst of Grammatica voor de School》であるが、版元についてはどのような文字をあててよいのかわからない。

同藩はラテン語の辞書も買い入れているが、それはつぎのようなものである。

九 ウラールデンブック、デル、ラティンセタール

一冊

一八百三十六年 千八百一十九年

ハ、スルチン

同書の欧文タイトルは《Woordenboek der Latijnsche (または Latijnsche) Taal》であろうか。出版社については不明。

Lexicon Manuale Latinum, etymologico ordine dispositum ab E. Kaerhero. ad usum Belgicae juven tutiscuravit et auxit J. Bosscha, Phil., Theor. Mag. Litt. Hum. Doct. et in Athen. Amstelod. Prof. Editio Altera, Emmendatior. Lugduni Batavorum et Amsterdam, apud S et J. Luchtmans et J. Radink MDCCCXLY

(大意) 『ラテン語辞典』、一八四五年ライデンおよびアムステルダム刊。E・ケルヒャーが語源にしたがって分類し、ベルギーの青年が使用で
きるようにJ・ボスカ教授が増補した。S・T・ルフトマンズおよびJ・ロディンク社より刊行。

本の大きさは、23.5 cm×14 cm。厚さは4 cm。本文は五八〇頁。

Handwoordenboek Latijnsche Taal, naar de tiende uitgave van het Lateinsch-Deutsches Handwörterbuch van Dr. Karl Ernst Georges, met de noodige bekortingen voor Nederlanders bewerkt, door Mr. J. A. Scheiher, Rector van het Gymnasium te Groningen, te Groningen, bij de Erven C. M. van Bolhuis Hoitsema, 1854

『中型ラテン語辞典』一八五四年フロニンゲン刊。

この辞書は、カルル・エルンスト・ゲオルゲス博士編の『中型羅独辞典』(十版)をもとにしており、フロニンゲンのギムナジウムの校長J・A・シュナイターがオランダ人のために縮小したもので、フロニンゲンのエルフェン・セー・エム・ファン・ボルハイス・ホイトセマ社から刊行された。

本の大きさは、25.7 cm × 16 cm。厚さは6 cmである。本文は一九二六頁。

Latijnsch Woordenboek, naar de elfde uitgaaf van dat van Dr. K. E. Georges op nieuw bewerkt door D. Engelbregt Hoogleraar te Amsterdam, Groningen J. B. Wolters, 1865

『ラテン語辞典』一八六五年フロニンゲン刊。この辞典は、カルル・エルンスト・ゲオルゲス博士が編んだラテン語辞書(十一版)に、阿姆斯特ル大学教授のエンゲルブレヒトが新たに手をくわえ、フロニンゲンのJ・B・ボルター社より刊行。

本の大きさは、25 cm × 16 cm。厚さは5 cm。本文は一九八二頁。

先にかかげたポルトガル語関係の舶来本にしても、またいまのべたラテン語関連のものにしても、いかなるルートを経て蕃書調所の書庫に収まったものか明らかでない。おそらく幕府の洋学機関の依頼をうけた長崎会所が、出島のオランダ商館を通じて本国に発注し

たものであろう。

一八六〇年六月十一日(万延元四・二二)、出島のオランダ商館の簿記係J・A・G・パスレが、長崎会所(de Geldkamer)に宛てて出した報告書のなかに、ラテン語の辞書(「羅蘭辞典」)の購入部数と値段をしるしたものが見られる⁽²⁸⁾。

Boekenlyst No.13
(書籍のリスト)

getal exemplaar (部数)	Titels (書名)	prijs per exemplaar (部数の代金)	totaal bedrag (総計)
2	Schneither. Latynsch en Nederlandsch woordenboek	112	222
2	Karcher. Latynsch en Nekl. woordenboek.	81	162

注・()内は、引用者による。

このみじかい説明だけでは、正式な書名や出版社名もわからないが、おそむく

前者はJ. A. Schneither 編 Handwoordenboek Latijn Taal……bij de Erven C. M. van Bolhuis Hoitsema (何版か、刊行年不詳) のことか。また後者は、E. Kaercher 編 Latijnse-Nederduitsch, Nederduitsch-Latijnse Woordenboek……S. en J. Luchtman (何版か、刊行年不詳) のことかと思われる。

ともあれ各二冊ずつ購求し、代金三十八匁四分(約三十八両?) 支払ったようだ。また平戸の松浦家の蔵本に、Franco du Bois: Dictionarium Latins-Belgium というものが見られるが、刊行年は記されていない。江戸時代に購求したものであろうか。⁽²⁹⁾

*

つぎに明治期以後、わが国で刊行されたラテン語の語学書について述べてみよう。
国立国会図書館の蔵本によって、いちばん古い順にかかけると、つぎのようになる。

菅野虎太編訳『羅甸七科字典』（英蘭堂、明治12・9）

これは洋装本である。本の大きさは、15.5 cm × 11.5 cm。三〇七頁。医学および自然科学者のための羅日辞典である。

高橋金一郎著『らてんの曲ゲ大意』（岡山孤兒院活版部、明治31・7）

これは洋装本である。本の大きさは、23.3 cm × 15.4 cm。本文は二八頁。語彙九頁からなる。主として名詞や形容詞などの語形変化についてのべたものである。英文で書かれた「序」によると、医学書をよむとき、ラテン語の知識がないと、正しく意味をとることができない、という。

鈴木竜六著『羅甸文典講義』（丸善商社、明治21・9）

これは本邦初のラテン語文法の入門書であろうか。第一篇は名詞の変化から説き、さいごの第七篇は前置詞でおわっている。これは洋装本である。本の大きさは、19.3 cm × 12.7 cm。本文は九三頁。

水野繁太郎著『教科及羅甸文法階梯』（南江堂蔵版、明治36・5）

これは洋装本である。本の大きさは、19.5 cm × 13 cm。本文は二三三頁。ラテン文法の概説書である。

「凡例」に「本書は多くの羅甸文法書を参考にし、其重要な点を抜きて此れを編纂したもにて成るべく簡明に説明し、文法の大要を把握し易からんことを主とせり」とある。

同書は、過去にドイツ語を学んだことがある者のために講じたラテン文法にもとづくものであり、それに修正をくわえ、何人にも理解してもらうために日本語で叙注した、と語っている。

島田耕一篇『羅甸語処方文例 全 附 簡約羅甸文法』(大阪同済号書房、明治41・8)。

これは洋装本である。本の大きさは、21.9 cm × 15 cm。本文は五一頁。著者は「序文」において、「羅甸語ハ希臘ト併テ諸専門ノ学科就中医ノ薬ノ学科ヲ修ムル者ノ重要視スヘキ學術語ナリ」とのべている。内容は、名詞・形容詞・副詞・動詞その他の変化について説明したあと、処方略語、その文例、各器具の語彙などをかかっている。

大正期は、ラテン語関連の語学書は刊行されなかったものか、ほとんど見かけない。が、昭和期に入るとぼつぼつ刊行されるようになる。

神宮徳寿著『^{たくと}独習羅典語の研究』(郁文堂書店、昭和2・1)

Hidenaka Tanaka: Nova Grammatica Latina, Tokio, Sumptibus IWANAMI Bibliopolaе, MM DLXXXIX

市河三喜著『ラテン・ギリシヤ語初歩』(研究社出版、昭和5・1)

ブラトンIIアリストテレス学会編『ギリシアIIラテン講座(第三部)ラテン』(鉄塔書院、昭和7・2)

呉茂一著『ラテン文法概要』(鉄塔書院、昭和8・4)

若目田武次著『ラテン語階梯』(健文社、昭和10・6)

村松正俊著『ラテン語四週間』(大学書林、昭和11・7)

- 大村雄治著『ラテン語第一歩』（白水社、昭和11・9）
- 田中秀央編著『ギリシヤ・ラテン引用語辞典』（岩波書店、昭和12・10）
- 落合太郎編著『ラテン文法綱要』（要書房、昭和13・3）
- 呉茂一著『ラテン文法綱要』（要書房、昭和18・5）
- 田中秀央著『ラテン文学史』（生活社、昭和18・5）
- 呉茂一著『ラテン文法綱要』（要書房、昭和23・5）
- 〃 『ラテン文法綱要 演習篇』（要書房、昭和23・5）
- デル・コール著『ラテン語四ヶ年 第一巻』（ドン・ボスコ社、昭和26・1）
- 泉井久之助著『ラテン広文典』（白水社、昭和27・2）
- 田中秀央編『羅和辞典』（研究社辞書部、昭和27・9）
- これは本邦における唯一無比の羅和辞典である。
- 呉茂一著『ラテン語入門』（岩波書店、昭和27・10）
- 田中秀央編『初等ラテン語読本』（研究社出版、昭和28・10）
- 呉茂一
野上素一編『ラテン名家選』（岩波書店、昭和32・3）
- 呉茂一
泉和吉共著『ラテン語小文典』（岩波書店、昭和32・4）
- 有田潤編『ラテン語基礎一五〇〇語』（大学書林、昭和32・9）
- 有田潤著『初級ラテン語入門』（白水社、昭和39・1）
- 大村雄治
古川晴風
有田潤編『全訳・注解 やさしいラテン語読本』（大学書林、昭和39・6）
- 磯部幸一著『医学生のラテン』（大学書林、昭和49・3）
- 大塚光信解題『羅西日辞書』（勉誠社、昭和54・2）
- これはドミニコ会宣教師コリヤードの編著『羅西日辞書 (Dictionarium sive Thesavri Lingvae Japonicae Compendium)

Romae, 1632) の複製版である。

- 柴田光蔵著 『法学ラテン語綱要〔増補版〕』(玄文社、昭和54・12)
- 関野清二編訳 『ケンブリッジラテン語講座』(泰流社、昭和56・2)
- 二宮陸雄著 『ラテン語構文と語法の研究』(篠原出版、昭和58・1)
- 有田潤著 『インデックス式ラテン文法書』(白水社、昭和59・3)
- 河底尚吾著 『ラテン語入門』(泰流社、昭和59・12)
- 柴田光蔵著 『ローマ法ラテン用語辞典』(補訳版)(玄文社、昭和59・12)
- 〃 『法律ラテン語辞典』(日本評論社、昭和60・6)
- 有川賢太郎
長谷川洋
鈴木繁夫編訳 『現代ラテン語会話―カペラーヌス先生の楽しいラテン語会話教室』(大学書林、平成5・7)
- 河底尚吾著 『演習ラテン語文法』(篠原出版、昭和60・9)
- 松平千秋
國原孝之助著 『新ラテン文法』(東洋出版株式会社、平成4・9)
- 小林標著 『独習者のための楽しく学ぶラテン語』(大学書林、平成4・10)
- 木下文夫篇 『和羅小辞典』(国際語学社、平成6・5)
- 伊藤太吾著 『ラテン語からスペイン語へ』(大学書林、平成6・11)
- 中山恒夫著 『ラテン語練習問題集』(白水社、平成7・9)
- 戸部実之著 『実用ラテン語入門』(泰流社、平成9・4)
- 大西英文著 『はじめてのラテン語』(講談社、平成9・4)
- 風間喜代三著 『ラテン語とギリシャ語』(三省堂、平成10・3)
- 木下文夫篇 『和羅辞典』(国際語学社、平成12・2)
- 逸見喜一郎著 『ラテン語のはなし―通読できるラテン語文法』(大修館書店、平成12・12)

*

日本語に及ぼせるポルトガル語とラテン語の影響。

天文十年（一五四一）七月にポルトガルの船二隻が暴風雨に遭い、一隻は鹿児島に入り、他の一隻は大分の神宮寺浦に着いたときから、日本とヨーロッパの交通が開かれるのであるが、寛永十六年（一六三九）のポルトガル船の来航禁止までの約百年間に、西洋の文物がわが国に移入され、わが国の文化は大きな影響をうけた。

この間、いちばん優勢であった外国語は、ポルトガル語やスペイン語、ラテン語などであるが、中でもポルトガル語はこんにちに至るも現存し、外来語として日本語化しているものも少なくない。それらは安政の開国後から大正初期ごろまで盛んに用いられたが、カステラ、タバコ、テンブラ、パン、ボタンのようにいまだに使っている語もある。

つきにかかげる語は、日本語化したポルトガル語とラテン語の代表的なものである。

〔ポルトガル語〕

アmend	amêndoa	アーモンド
アルヘー(ロ)	alfeio	カラメル状の砂糖菓子
ウニコール	orgão	パイプオルガン、楽器
オルガン	casual	偶然的、意外な
カズワル	canequim	金巾
カナキン	carta	手紙、証書、トランプ
カルタ	calcão	半ズボン
カルサン	castella	カステラ
カステーラ	caramela	カラメル、キャラメル
カルメラ		

カレウタ	galeota	小型のガレー船
カボチャ	cambodia	南瓜
カピタン	capitano	船長、商館長
カッパ	capa	マント
カンテラ	candela	カンテラ
ギヤマン	diamante	ダイヤモンド
ロップ	copa	容器
ロンベート	compeito	金米糖
サボン、シャボン	sabao	石けん
サラサ	Sarasa	更紗
サージ	sarja	サード(繊維)
ザボン	zamboa	ジャガタラみかん
ジオメトリ	geometria	幾何学
ジュバン、ジバン	gibaō	褌袴、下着
タバコ	tabaco	タバコ
ドン	don	王侯貴族にたいする敬称
タフタ	tafeia	琥珀織り
タンク	tanque	タンク、水槽
タント	tanto	多数(量)、それほど多くの
チャルメラ	charamela	泡糖
テンプラ	tempero	(原義は調味料) テンプラ
ドン・ファン	don juan	女たらし

トタン	tudanaga	亜鉛
バッテリー	bateira	(平底の)小舟
ハアカー	faca	ナイフ、包丁
パン	paõ	パン
バンコ	banco	ベンチ、屋台、銀行
パスタ	pasta	ねり物
ピストル	pistola	ピストル、スペインの金貨
ビードロ	vidoro	ガラス、ガラス製品
ビロード	veludo, velludo	ビロード
ビスコイ	biscoito	ビスケット
フラスコ	frasco	ガラスの小ビン
ブランコ	balanco	ブランコ
ベランダ	veranda	ベランダ
ボタン	botaõ	ボタン、芽、つぼみ
ポーロ	bolo	ケーキ、ドーナツ
ポーブラ	abobora	カボチャ
マントー	manto	外とう、マント
マンティカ	manteiga	バター
マルメロ	marmelo	マルメロの果実
ミサ	missa	ミサ
メリヤス	meias, medias	メリヤス
ラシヤ	raxa	ラシヤ(毛織物の一種)

ランセッタ	<i>lanceta</i>	(外科用の) 乱切刀 <small>ランセアト</small>
ランビキ	<i>alambique</i>	蒸留器
ワカ	<i>vaca</i>	牛肉

徳川時代にキリシタン宗門に関係したラテン語のうち、借用したと思われる語につきのようなものがあるが、その数はひじょうに少ないとされる。それらの借用語の多くは、いまでは廃語となり、死滅している。

アニマ	<i>anima</i>	精神、生命	カンタリス	<i>cantharis</i>	皮膚薬、媚薬
エリキシル	<i>elixir</i>	靈薬	デウス	<i>deus</i>	神
エキレシヤ	<i>ecclesia</i>	教会、集会	テリアカ	<i>theriaca</i>	噛み傷薬(毒消し)

しかし、わが国の近代文学者のなかには、キリシタン用語(宗教語)を創作において意図的に用いた者も少なからずいた。たとえば、歴史小説において南蛮趣味を活かした芥川龍之介(一八九二〜一九二七)などは、その代表格のひとりであるが、ポルトガル語やラテン語を創作に混入させた。

アンヂョ	<i>anjo</i>	(ポ) 天使	ゼス・キリスト	<i>Jesus Christo</i>	(ポ) イエス・キリスト
バプチズモ	<i>batismo</i>	(ポ) 洗礼	エス・キリスト		
コヒサン	<i>confissão</i>	(ポ) 告白	ルシヘル	<i>lucifer</i>	(ポ) 悪魔、サタン
コンタツ	<i>contas</i>	(?) 念珠	マリヤ	<i>Maria</i>	(リ)(ポ) マリア
クルス	<i>cruz</i>	(ポ) 十字架	マルヂリ	<i>martyrio, martirio</i>	(ポ) 殉教
デウス	<i>deus</i>	(ポ)(リ) 神	ミサ	<i>missa</i>	(リ)(ポ) ミサ

ヂャボ	diabo	(ポ) 悪魔	ナタラクリスマス	Natal Christmas	(英) キリスト降誕祭
エケレシヤ	ecclesia	(ラ) 教会	パテレン	padre	(ポ) 神父
ゼンチョ	gentio	(ポ) 異教徒			
グローリヤ	gloria	(ラ)(ポ) 栄光	ハライン	paraiso	(ポ) 天国
アビト	habito	(ポ) 僧衣、衣服	サガラメント	sacrament	(ポ) 秘跡、告白、聖体
インヘルノ	inferno	(ポ) 地獄	サガラメント		
イルマン	irmão	(ポ) 助修士、仲間	ビルゼン	virgem	(ポ) 処女
ゼスス	Jesus	(ポ)(ラ) イエス・キリスト			

*

そもそも日本人はヨーロッパの言語をどのように学んできたのか、その学習の沿革について研究してみたいとおもってから年久しい。この研究を志した動機は、他日、日本洋学史研究の一環として、日本人の外国語受容についてまとめたいと思っているからである。

しかし、この種の研究は、各国語にわたるため、語学の素養に乏しいわたしには手に余るものである。が、まだまとまった研究がなただけにやりがいのある仕事といえる。

その第一歩として、ポルトガル語とラテン語の学習とその受容について概括したのが本稿である。一定でいど材料をあつめ、なるべく原史料にあたり、手をつけてみてはじめて、容易ならざる仕事であることを実感し、しばしば嘆息した。まずは言葉の大きな壁。そして東奔西走してあつめた文献資料の取捨にまよった。が、斯学の先達の論著に導びかれながら、おぼつかない足取りで進み、どうか形をととのえることができた。

当然説かねばならぬスペイン語の学習の沿革とその受容については、本稿においてふれられていない。スペイン人がはじめて日本に來航したのは、天正九年(一五八一)二月のことであり、ポルトガル人におくれること約五十年であった。南蛮貿易時代、スペイン人

は布教と貿易の点でポルトガル人に比べて、それほど顕著な活躍をしておらず、わが国の精神文化に及ぼせる影響もいたって小さかったかとおもえる。

既述のごとく、当時の標準外国語はポルトガル語であり、同語は日本語とふかいかかわりを持ち、衣服・食物・キリシタン関係の用語としてよく使われたが、禁教令が出てからは、スペイン語と同様に多く用いられなかった。宗教用語としてのスペイン語は、わずかに、「コミサリオ」 *comisario* (管区長代理)、「コンヘション」 *confesion* (告白) など数を数えるのみという(重久篤太郎『日本近世英学史』)。

さいごに近代日本において、ポルトガル語やラテン語を教えた教育機関について若干ふれておきたい。

ポルトガル語を正式に教えたのは、東京外国語学校であり、大正五年(一九一六)一月、文部省令第五号によって「葡語学科」が新設されて以来、こんにちに及んでいる。大阪外国語大学に「ポルトガル・ブラジル語学科」が新設されたのは、昭和五十四年(一九七九)である。もっとも同大学におけるポルトガル語教授の歴史は古く、大阪外国語学校開校当初から西語部の兼修語であった(『大阪外国語大学七〇年史』)。

一方、ラテン語についていえば、明治六年(一八七三)東京開成学校(東大の前身)の英法科予科第二級において、文法と読本を教授しているし、明治十年代の東京大学医学部において、週に四、五時間、文法と読本(用書は『ゲヂツケ・ホフマン氏著作』)とおしえている。

神田乃武(一八五七〜一九二三)は、明治・大正期の著名な英学者であるが、明治十六年(一八八三)動物学を専攻する二年生にアンドリュウまたはストダード著の文法や読本(『シーザーの著書』——『ガリア戦記』か)を教授した(『東京大学年報 第一巻』)。

*

本稿をまとめるにさいして、国内外の諸機関のお世話になった。海外では、英国図書館、ポルトおよびエヴオラの公立図書館、国内では、国立国会図書館、長崎県立図書館、静岡県立中央図書館、沼津市立駿河図書館、財団法人東洋文庫、上智大学附属図書館

(キリシタン文庫)、慶応義塾大学附属図書館、早稲田大学中央図書館などの諸文献と史料を利用させていただいた。記して謝意を表します。

Acknowledgements.

My grateful thanks are due to the British Library in London and the public libraries at Porto and Evora in Portugal for permission to consult and copy relevant documents.

Thanks are also due to Mr. José Chitas for providing assistance during my research in Portugal.

注

- (1) 海老沢有造の「ヤジロウ考」(『切支丹史の研究』所収、叡徳書房、昭和十七年九月)は、アンジローに関するもっともくわしい研究である。キリスト教に入信したアンジロー(新村出、姉崎正治らは「弥次郎」という漢字を当てている)について日本側史料はなく、海外史料にだけその名が散見する。
- アンジローの表記をトゥルセルニの『ザビエル伝』De Vita B. Francisci Xaverii (1610)は、二五八―二五九頁において Anger とし、クラッセの『日本教会史(西教史)』Histoire de L'Eglise du Japon, tome Premier (1715)の五六頁では Anger、シャルルボワの『日本キリスト教史』Histoire du Christianisme au Japon, tome Premier (1828)の四〇―四二頁では Anger とする。A・フレックの Saint François Xavier, tome Premier (1912)では Yajiro とする。本稿では、ザビエル書簡にみられる Anjito とする呼称を用いた。
- (2) 土井忠生「十六・七世紀における日本イエズス会布教上の教会用語の問題」(『キリシタン研究』第十五輯所収)、三三頁。
- (3) ゲオルク・シュールハンメル「日本に於ける聖フランシスコ・ザヴィエール―一五四九―一五五一年」(『キリシタン研究第一輯』所収)、二五―一頁。
- (4) 外山卯三郎『きりしたん文化史』(地平社、昭和十九年九月)、二頁。
- (5) Le P. Bouhours: Vie de St François Xavier de la Compagnie de Jésus, apotre des Indes et du Japon, Étienne Repos, Paris,

- (e) La vie du bien-heureux pere Francois Xavier, premier de la Compagnie de Iesys, qui a porte L'Evangile aux Indes, & au Japon. Divisee en six liures par Horace Turselin de la Compagnie de IESUS, & traduire en Francois par un Pere de la mesme Compagnie. A Doy, de l'imprimerie de Baltazar BELLERS, au Compas d'or, l'an 1608, p.348
- (7) Le P. de Charlevoix: Histoire du Christianisme au Japon, tome Premier 1828, p.41
- (8) ルイス・フロリスは、アンシローがこの学院にいた期間を、六カ月としてゐる(松田毅一訳『フロイス 日本史 6』(中央公論新社、平成十二年六月)、二五頁。
- (e) Histoire de L'Eglise du Japon, par le R.P. Crasset de la Compagnie de Iesus. Seconde Edition, Tome Premier. A Paris, chez Francois Montalant, à l'entree du Quay des Augustins, du côté du Pont S. Michel. M. DCC. XY. Avec approbation & Privilege du Roy, p.59
- (10) 村上直次郎訳註『耶蘇会の日本年報 第一輯』(春秋社、昭和十八年一月)、三〇四頁に訳文がかかげてある。
- (11) 岸野久『ザビエルと日本—キリシタン開教期の研究』(吉川弘文館、平成十年十一月)、二〇頁。
- (12) 同右。
- (13) 注(10)の二〇—二一頁。
- (14) アルベ^ル神父 訳『聖フランシスコ・ザビエル書翰集(上巻)』(若波書店、昭和五十二年九月)、二六頁。また、A. Brou 著 Saint Francois Xavier 1506-1548 tome Premier, Gabriel Beauchesne & C^e, éditeurs, 1912 の四三三頁にもおなじ記述がみられる。
- (15) 古賀十二郎『長崎洋学史 上巻』(長崎文献社、昭和四十一年三月)、六頁。
- (16) 注(3)の二五二頁。
- (17) 注(14)の『聖フランシスコ・ザビエル書翰集』(上巻)、二六六頁。
- (18) 海老沢有造『切支丹史の研究』(叡傍書房、昭和十七年九月)、三四五頁。
- (19) 同右、三四五—三五〇頁。
- (20) 『ドチリナ』は、ポルトガル語の doutrina(ドゥトリナ)(教義、学説)にもとづく外来語であり、ザビエルが用いたのは、リスボンのインド商館の館長

- Joan de Barros (1496~1570) が著したドチリナのドチリナ小冊子であった。同書は、ポルトガル本国やインドのポルトガル人の子供たちのために作成されたものという。
- ザビエルはバーホスの本に手を加え(ラテン語の祈りを削除し、あらたに十ヶ条を加え)、計二十九ヶ条とした。亀井孝
H・チー
小島幸枝『日本イエズス会版 キリシタン要理―その翻案および翻訳の実態』岩波書店、昭和五十八年十一月、一二三頁を参照。
- (21) 注(8) におなじ。
- (22) Le P. de Charlevoix: Histoire du Christianisme au Japon, tome Premier, Librairie Ecclésiastique de Rusan, Paris, 1828, p. 44
- (23) 注(18) の二五四頁。
- (24) 松田毅一 訳『フロイス 日本史 8 大友宗麟篇Ⅲ』(中央公論新社、平成十二年八月)、六一頁。
川崎桃太
- (25) 注(9) の四四〇頁。 De Vita B. Francisci Xaverii, qui primus è Societate IESV in Indiam & Iaponiam Evangelium inuexit, Libri sex HORATII TVR-SELLINI, E SOCIETATE IESV. ab eodem aucti & recogniti, in bacylima editione, Colonizae Agrippinae, apud Iannem Kinckium sub Monocerote Anno M. DC. XCVI, 三三四頁。
- (26) フーベルト・チースリク『世界を歩いた切支丹』(春秋社、昭和四十六年六月)、五五頁。
- (27) A. Brou: Saint François Xavier 1548-1552, tome second, Gabriel Beauchesne & C^e Editeurs, 1912, p. 390
- (28) Pasquale M. D'Elia S.J. 「ローマを訪れた最初の日本人ベルナルド(一五五五年)」(『キリシタン研究 第五輯』所収) 一二頁。
本田善一郎 訳
- (29) 注(26) の六〇頁。
- (30) ニエレンベルグ 訳「鹿児島ニエレンベルグのベルナルド」(『史学』特輯ザビエル研究) 第二十三卷第四〇号所収、三〇頁。
岩谷十二郎
- (31) 同右。
- (32) 注(30) の六三〜六四頁。
- (33) 注(30) の五八頁。
- (34) P.-L. Jos-Marie Cros, S.J.: Saint François de Xavier-Sa vie et ses lettres, tome second François de Xavier en Chine et au Japon, Toulouse/Paris, 1900, p. 150
- (35) 注(28) の一四頁。

故国日本をはなれ、はるかかなたのヨーロッパにまで修業に出たイエズス会士のベルナルドは、帰国することなく、コインブラの土となった。わたしは先年この丘陵の町に滞在したとき、その墓をぜひ見たいとおもい、いろいろ駆け回り回ったが、みじめな結果におわった。

昭和初期、ポルトガル旅行をしたキリシタン史家の岡本良知も、コインブラにおいて「ベルナルドの亡くなった跡をもしや知りえたら」といった希望をもって、いろいろ捜したようであるが、けっきょくその捜索を断念した。

ベルナルドの墓に注意を払い、それをじっさいに見た人間はそれほど多いとは思われないが、おそらくフーベルト・チースリク師こそ、それをさいごに見た一人であろう。かれは自著の中で、その目撃談をつぎのように語っている。

彼の墓石は、もはやその文字の判読ができないほど風化しているが、今もなお、コインブラのイエズス会学院の墓地にあって、ヨーロッパへ渡った最初の留学生の哀愁をとどめている（『世界を歩いた切支丹』、六四頁）。

この記事によると、ベルナルドは、イエズス会の学院^{コレッジ}の墓地に葬られているということだから、わたしは学院の建物をまず捜すことから手をつけた。ペディカーの旅行案内『スペインとポルトガル』（一九一三年）の「コインブラ」の項（五四二頁）の中に、つぎのようなくだりがある。

オイト・デ・マイオ広場 (Placa Oito de Maio) の北にあるソフィア街 (Rua da Sophia) には、十六世紀中頃の後期ルネサンスの建物がいくつもある。その中には、一五九七年に建てられた教会をもつコレジオ・ドォ・カルモ (Collegio do Carmo) ¹、いまは馬車工場となっているサウン・ドミンゴス (Sao domingos) の未完成の教会、そしてイエズス会のコレジオ (Collegio dos Jesuitas) ² の唯一の遺跡であるすばらしい中庭などが含まれる。

二十世紀初頭には、イエズス会のコレジオの建物は、中庭をのぞくと、すでに地上から消滅していたことがこれでわかる。問題は同学院の墓地の所在地であるが、けっきょく調べがつかなかった。おそらく学院からさほど遠くないところにあったものとおもわれる。ソフィア街には、コレジオ・ドォ・カルモとサウン・ドミンゴスはいまもある。

現在、コインブラの町はずれにイエズス会の墓地があり、わたしはそこも訪れたが、それは比較的新しいものであるから搜索の対象からはずれており、ベルナルドが葬られた所ではない。フーベルト・チースリク師が、学院の墓地の位置（所在地）についてくわしく語らなかったことが惜しまれる。

- (36) ルイス・フロイス原著『九州三侯遣欧使節行記』（東洋堂、昭和十七年一月）、六頁。
岡本良知訳注
- (37) 幸田幸友『日欧通交史』（岩波書店、昭和十七年六月）、一〇〇頁。
- (38) グワルチュルリ著『日本遣欧使節記』（岩波書店、昭和八年三月）、三九頁。
木下李太郎訳
- (39) 注(36)の三六頁。
- (40) La Première Ambassade du Japon en Europe 1582-1592, Première partie le Traité du Père Frois (Texte portugais), ouvrage édité et annoté par J. A. Abranches Pinto, Yoshitomo Okamoto, Henri Bernard S. J., Tokyo Sophia University, 1942 © Annexe C © 一七頁を参照。
- (41) 注(36)の四四頁。
- (42) 新村出『日本吉利支丹文化史』（地人書館、昭和十六年五月）および^{上智大学編纂}独逸^{ヘンデル書肆}共篇『カトリック大辞典』（富山房、昭和十五年十一月）などを参照し、まとめたもの。前者の新村の著書は、キリシタン学をまなぶさいの入門書としてひじょうにおもしろく、かつ有益な書である。津田左右吉（一八七三〜一九六一、歴史学者）は、この本を精読していたようであり、早稲田大学中央図書館の地下に、付せんがいっぱいついた同書が収められている。
- (43) 大槻如電原著『日本洋学編年史』（鳳文書館、平成七年四月）を参照。
佐藤栄七増訂
- (44) 村井昌弘輯録「耶蘇天誅記前録 全」（写本）を参照。
- (45) 村上直次郎『貿易史上の平戸』（日本学術普及会、大正六年四月）、九頁。
- (46) 注(43)の二二頁。
- (47) 注(45)の一四〜一五頁。
- (48) 注(43)の一頁。
- (49) 注(15)の四二頁。

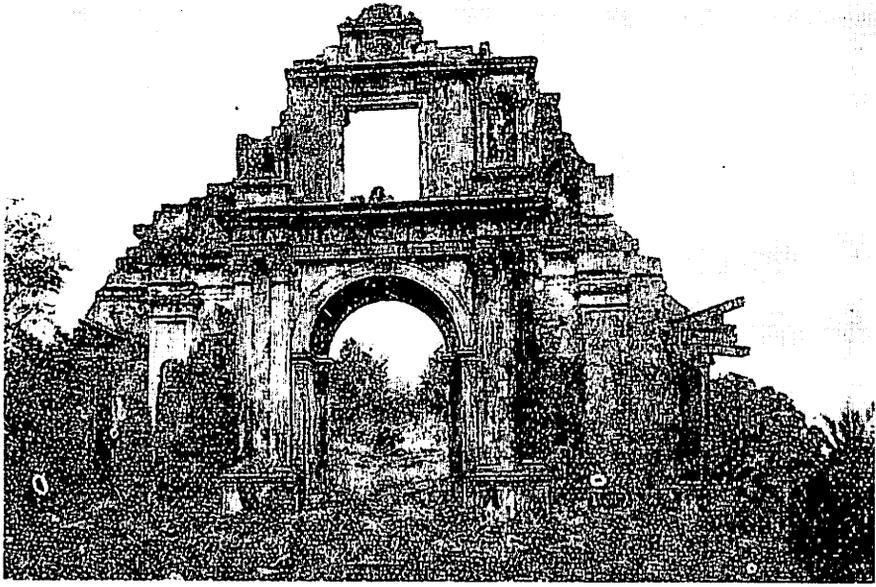
- (50) 同右。
- (51) 松田毅一訳『フロイス 日本史 1 織田信長篇 I』(中央公論新社、平成十二年一月)、二二一〜二二三頁を参照。
川崎桃太郎
- (52) 村上直次郎「安土桃山時代の基督教」(『安土桃山時代史論』所収、日本図書センター、昭和五十一年九月)、三五七頁。
- (53) 同右、三五八頁。
- (54) 『カトリック大辞典』、七七三頁。
- (55) 海老沢有造校注『長崎版 どちらな きりしたん』(岩波書店、昭和二十五年二月)の「洋語略解」を参照。
- (56) 注(4)の八頁。
- (57) 助野健太郎「切支丹伝道士学校の研究」(『切支丹史論叢』所収、小宮山書店、昭和二十八年十二月)、五七〜五八頁。
- (58) 注(4)の七二頁。
- (59) P. Dorotheus Schilling O. F. M.: Das Schulwesen der Jesuiten in Japan (1551-1614), Druck der Regensbergischen Buchdruckerei, Münster i. w. 1931, ①三二頁以下、'Elementarschule' (初等学校)の語を使っている。
- (60) シリング著 岡本良知訳『日本に於ける耶穌会の学校制度』(東洋堂、昭和十八年三月)、五八頁。
- (61) 注(60)の八四〜八五頁を参照。
- (62) 「契利斯督期」の中の「学文之事」と題する項に、生徒が学んだであろうヨーロッパの学術のおおよその内容についての説明がある。『続々群書類従 第十二巻』(所収、明治四十年十二月)、六五七頁。
- (63) 浦川和三郎訳『元和五・六年の耶穌会年報』(東洋堂、昭和十九年三月)、一一九頁。
- (64) 注(57)の九七頁。
- (65) 注(42)の二二八頁。
- (66) 注(60)の二五一頁。
- (67) 注(43)および『カトリック大辞典』を参照。
- (68) 『フロイス 日本史 6 大友宗麟篇 I』、二二三頁。
- (69) 『フロイス 日本史 9 大村純忠・有馬晴信篇 I』、一八一〜一八二頁。

- (70) 『フロイス 日本史 10 大村純忠・有馬晴信篇 Ⅱ』、二五三〜二五四頁。
- (71) ヴァリニヤ、松田毅一他訳『日本巡察記』(平凡社、昭和五十七年九月)、一五五頁。
- (72) 同右、二二七〜三三二頁の「解題 Ⅱ」を参照。なお「時間割」については、Joseph Franz Schütte S. J. の Valignanos Missionsgrund sätze für Japan, Edizioni storia e letteratura, Roma, 1968 の四三八〜四四〇頁にも紹介記事がみられる。
- (73) 片岡千鶴子『キリシタン文化研究シリーズ 3 八良尾のセミナリオ』(上智大学内キリシタン文化研究会、昭和四十五年六月)、三二〜四二頁。
- (74) 片岡千鶴子『八良尾のセミナリオ』およびジョルダン・ア・デ・フレイタス『初期耶蘇教徒編述日本語学書研究』(日葡協会、昭和四年四月)を参照。
- (75) この辞典の作者名は不明である。いま同書はローマのヴァチカン使徒図書館にある。棄教者がつくったものらしく、南蛮通事のポルトガル語学習のために書かれたものと考えられている。ヴァチカン図書館蔵『葡和辞典』(臨川書店、平成十一年十一月)の「解説」を参照。
- (76) 幸田成友「サンデの遣欧使節記につき」(和蘭夜話)所収、同文館、昭和六年九月、二〇〇頁。
- (77) 土井忠生「長崎版日本文典と天草版拉丁文典」(史学)第十二卷第二号所収)を参照。
- (78) 土井忠生『吉利支丹論攷』(三省堂、昭和五十七年四月)、九五頁。
- (79) 注(77)の七三〜七四頁。
- (80) エマヌエル・バヘット撰のラテン詞華集の長いタイトルを「聖教精華」と訳したのは、言語学者の新村 出である。いまはこれが定訳となっている。
- (81) 白井信義「一六二〇年版「フロスクリ」の表紙裏から見出されたキリシタン文書」(日本歴史)第一一四号所収)。
- (82) 石田幹之助『南蛮雑鈔』(大正十五年七月『新小説』、『南蛮紅毛号』所収)、一〇二頁。
- (83) 注(15)の二〇頁。
- (84) ヴィルマン著 尾崎義訳『日本旅行記』(弘文堂、昭和二十八年九月)、四七頁。
- (85) 『通航一覽 卷之百九十五』。
- (86) 『南蛮意大里 亞國部二十 邏媽人渡来并扱方』(通航一覽 卷之百八十九)所収。

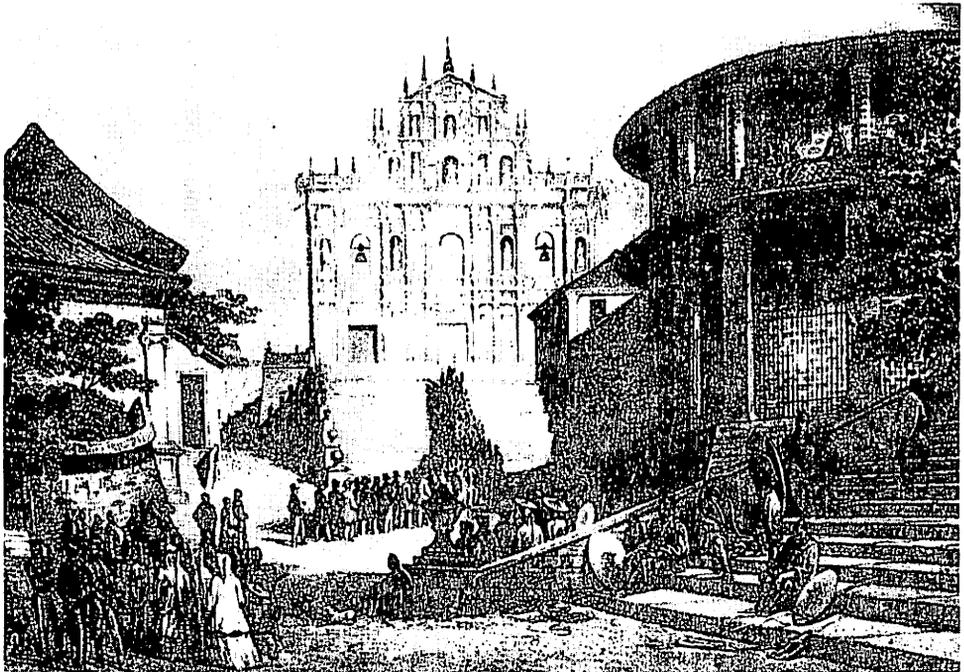
- (87) 「通航一覽 卷之百九十」。
- (88) 福島邦道「羅葡日対訳辞書の解題」〔羅葡日対訳辞書〕*Dictionarium Latino Lusitanicum ac Japonicum* 所収、勉誠社、昭和五十四年十月、十八頁。
- (89) 新村 出『日本吉利支丹文化史』(地人書館、昭和十六年五月)、一二六頁。
- (90) Ernest Mason Satow: *The Jesuit Mission in Japan 1591-1610*. Privated Printed 1888, p. 35
- (91) ミンソルグの『日本紀行(英訳、第三卷) Charles Peter Thunberg, M. D.: *Travels in Europe, Africa, and Asia, performed between the years 1770 and 1779, in four volumes, containing a voyage to Japan and travels in different parts of that empire in the year 1775 and 1776, vol. III, F. and C. Rivingson, London, 1795, p. 38*
- なお原書(スウェーデン語、全六卷)の第二卷(一七九一年刊)の四一頁に、このくだりが見られる。
- (92) 注(91)の三七頁。
- (93) 注(90)の二七頁。
- (94) Hirosato Iwai: *On the Latin-Portuguese-Japanese Dictionary published by the Jesuit Mission, The Toyo Bunko, Tokyo, 1953, p. 5*
- (95) 注(88)におなじ。
- (96) 注(88)の一九頁。
- (97) 『長崎叢書 増補長崎畧史 上巻 三』(長崎市役所、大正十五年十二月)、一頁。
- (98) 古賀十一郎『長崎開港史』(非売品、古賀十一郎翁遺稿刊行会、昭和三十二年八月)、一〇頁。
- (99) 『長崎と海外文化』(長崎市役所、大正十五年四月)、五九〜六〇頁。
- (100) C. R. Boxer: *Jan Companie in Japan, 1600-1850, Martinus Nijhoff, the Hague, 1950, p. 58*
- (101) 注(99)の六一頁。
- (102) 『長崎叢書 増補長崎畧史 下巻 四』(長崎市役所、昭和元年十二月)、一五六頁。
- (103) 注(44)を参照。

- (104) C. R. Boxer: *A Portuguese Embassy to Japan (1644-1647)*, Translated from an unpublished Portuguese MS. and other contemporary sources with commentary and appendices, Kegan Paul, Trench, Trübner & Co, London, 1928, p. 11
- (105) 注 (104) におなじ。
- (106) 「長崎阿蘭陀通詞出緒書」、『長崎洋学史 上巻』、『前野蘭化』その他よりまとめた。
- (107) 注 (104) におなじ。
- (108) 注 (15) の五二頁。
- (109) 武藤長蔵『日英交通史之研究』(内外出版印刷株式会社、昭和十二年四月)、八〇頁。
- (110) 岩崎克己『前野蘭化』(私家本?)、昭和十三年九月、六九頁。
- (111) 注 (15) の五四頁。
- (112) 注 (100) の五九頁。
- (113) 注 (15) の五七、五八頁。
- (114) このときの遣日ポルトガル使節の日本滞在記については、コルヴェット艦サウン・パウロ号の艦長のつぎの私記がくわしい。
Feliciano Antonio Marques Pereira: *Viagem da Corveta dom João I Á Capital do Japão no Anno de 1860*, Imprensa Nacional, Lisboa, 1863
- (115) 拙稿「日本におけるオランダ人墓」(『社会労働研究』第三五卷第二〇号) 所収。
- (116) 東京 (Tonkin または Tongking) は、いまの北ベトナムのハノイあたりをいう。東京に関する記述に、「東京 安南国の京也」(『異国渡海御朱印帳』)。「東京 此国根本交趾ノ都ナリシニ近代東京交趾ト格別ニ分レタリ往古ヨリ中華ノ仕配ニテ交趾ノ令トテ守護ヲ置タルハ此東京也ト云リ」(『蛮夷通商考』)。「江戸時代初期、日本人は御朱印状を下付され、平戸や長崎から安南、ルソン、シャムなど東南アジアに出かけ交易を行なった。魏五左衛門は、東京語とポルトガル語通詞をかねていたものか。
- (117) 土井忠生「長崎通事のポルトガル語について」(『言語研究』第五十四号) 所収。
- (118) 坪井九馬三「長崎市西勝寺文書に見ゆる外国語解説」(『史学雑誌』第十編第五号) 所収。
- (119) 新村 出監修『海表叢書 卷六』(更生閣書店、昭和三年十一月)、一、二七頁にかかげてある。

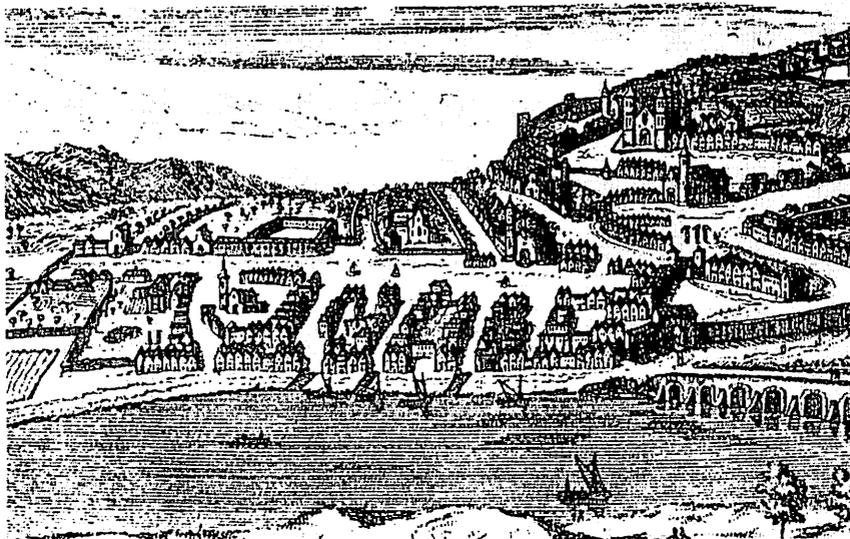
- (120) 『長崎県教育史 上巻』(臨川書店、昭和五十年七月)、五四頁。
- (121) 杉本つとむ 『江戸蘭語学の成立とその展開』Ⅲ―対訳語彙および辞典の研究』(早稲田大学出版部、昭和五十三年三月)、九四五頁。
- (122) 同右、九四七―九四八頁。
- (123) エヴァ・エミリ・ダイ著 『英学の祖―オレゴンのマクドナルドの生涯』(雄松堂出版、平成元年十一月)、二七八頁。
鈴木重吉・速川和男訳
- (124) 注(43)の一五二頁。
- (125) 中村喜代三『江戸幕府の禁書政策(下)』(『史林』第十一卷第四号)所収。
- (126) 板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』(吉川弘文館、昭和四十四年六月)、四六二頁。
- (127) 山脇悌二郎『長崎のオランダ商館』(中央公論社、昭和五十五年六月)、九二頁。
- (128) 板沢武雄『万延元年蘭書輸入に関する史料』(『日蘭文化交渉史の研究』所収)、六六六頁。
- (129) 小葉田淳監修『平戸松浦家資料』(京都大学文学部国史研究室編、昭和二十六年七月)、九八頁。
- (130) この項をまとめるにあたって、前田太郎の『外来語の研究』(岩波書店、大正十一年四月)、渡辺修二郎の『日欧交通西洋事物伝来の始』(『日葡交通 第一輯』所収(日葡協会、昭和四年六月)、荒川惣兵衛の『外来語学序説』(私家本、白馬堂印刷所、昭和七年八月)、浜崎国男の『長崎異人街誌』(葦書房、平成六年三月)などを参照した。



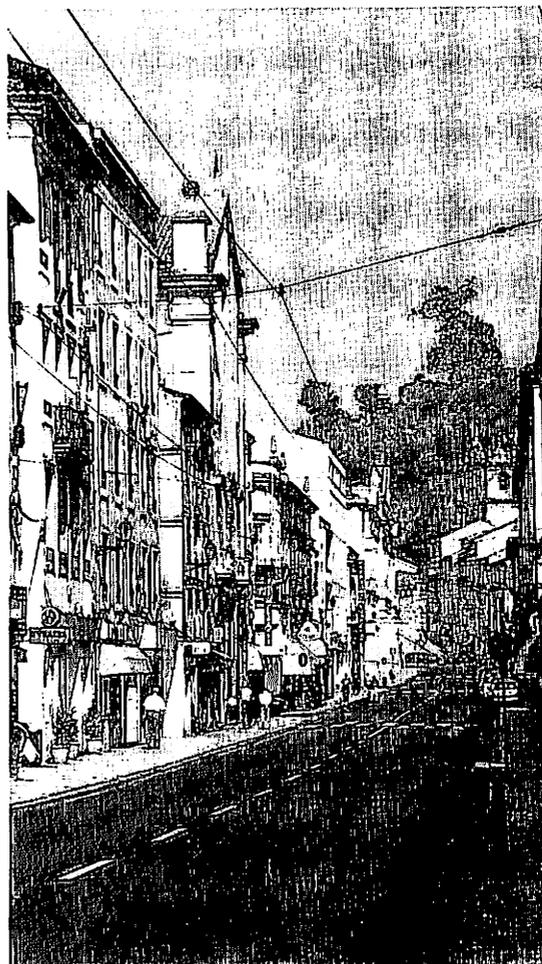
サウン・パウロ学院（ゴア）の廃墟の写真。日本人マテオはこの学院で亡くなった。
(Alberto. C.Germano da Silva Correia:La Vieille-Goa, Imprimerie Rangel, Basforá, 1931年刊より)。



天正遣欧少年使節らが立ち寄ったイエズス会のサウン・パウロ学院（マカオ）。右側手前の建物は、同学院附属のものか、いまはない。



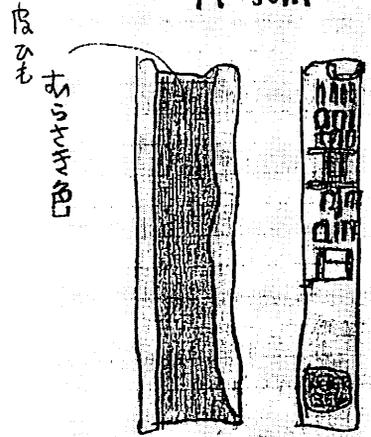
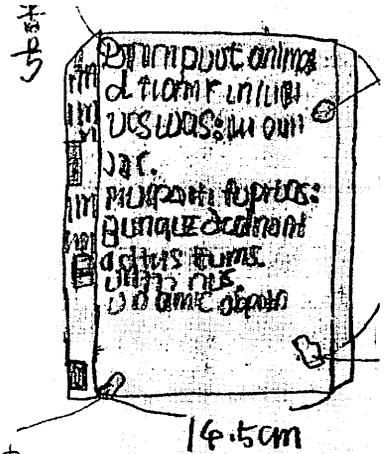
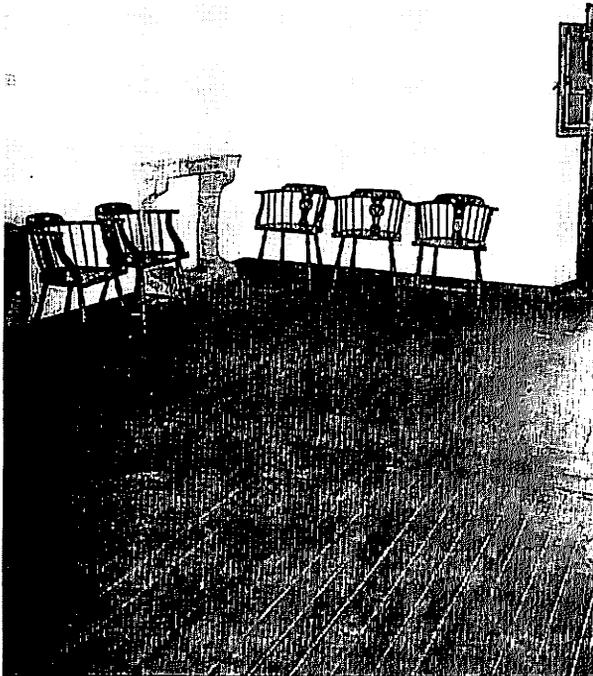
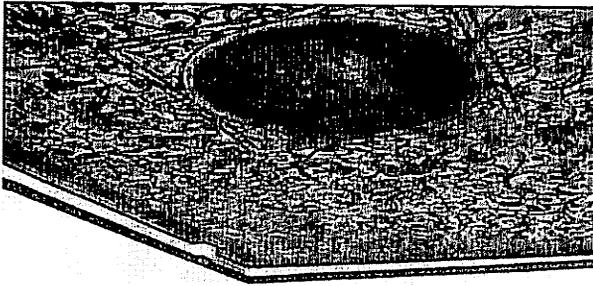
16世紀のコインブラの町（ポルトガル）を描いた銅版画。日本人ベルナルドはこの町で亡くなった。



現在のコインブラのソフィア街。左側から三軒目の建物はサウン・ドミンゴス（未完成の教会）。イエズス会のコレジオは同教会のちかくにあったものか。

（筆者撮影）

天正遣欧少年使節らがエヴォラの大司教より
 昼食を供せられた部屋。
 (筆者撮影)



デュアルテ・デ・サンデ「遣欧使節見聞
 対話録」(1590年刊)のスケッチ。
 (於 エヴォラの公立図書館)

エヴォラ Yellum 黄色

1599刊



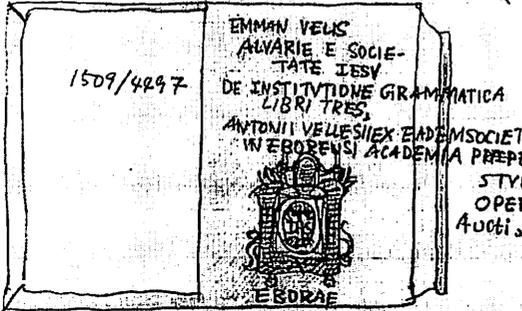
P. 791

厚さ約 5cm

番号 1509/4497

右基図書館蔵

マノエル・アルヴァレスの『ラテン文典』
(1599年刊)のスケッチ。
(於 英国図書館)

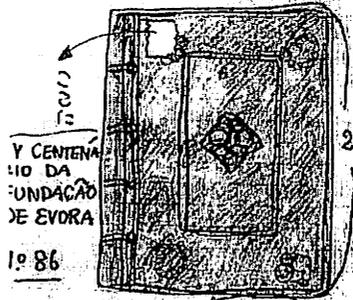


Excudebat Emmanuel de Lyra Typog
Cum facultate Inquisitorum, & Di

M. D. XCIX.

Fontis vellesii

Evora



Y CENTENA
NO DA
UNDACAO
DE EVORA

1086

XPOSITIO BIBLIO-16.5cm
GRAFICA

1569-1969

厚さ 2.5 cm
表紙は茶色
裏紙は黄色
紙は茶色
文字は黒
印刷は木版
1569年刊



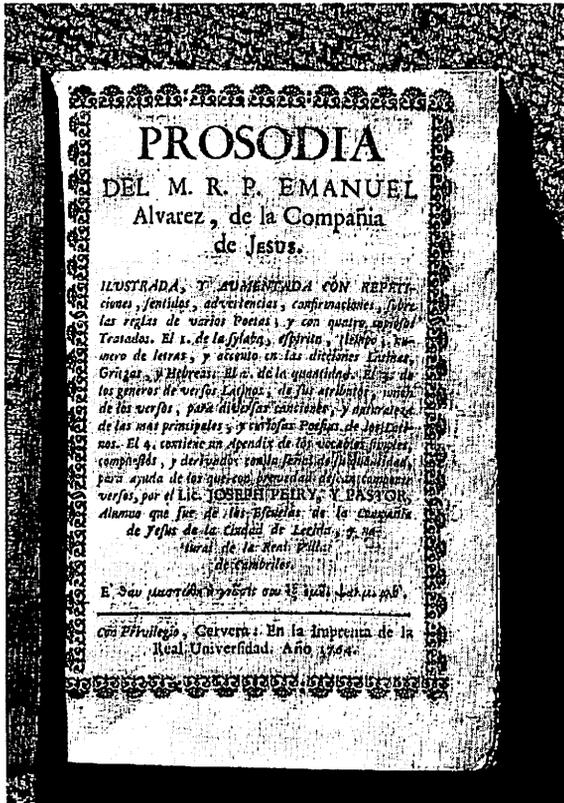
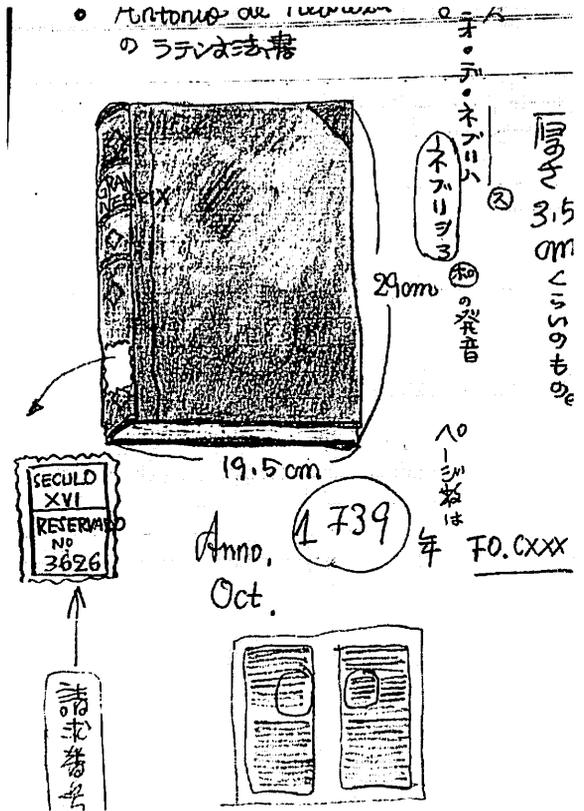
Interp
Iap

22.5 cm

1594年(文禄3年)に天草のコレジオ
で刷ったマノエル・アルヴァレスの『ラ
テン文典』のスケッチ。

(於 エヴォラの公立図書館)

中世においてよく用いられたアントニオ・デ・ネブリハの『ラテン文法入門』(1739年刊)のスケッチ。
(於 エヴォラの公立図書館)



マノエル・アルヴァレスの『作詩法』
(1764年刊) (筆者蔵)

FLOSCVLI
 EX VETERIS, AC NOVI
 TESTAMENTI, S. DOCTORVM,
 ET INSIGNIVM PHILOSOPHO-
 RVM FLORIBVS SELECTI.

Per Emanuelem Barretum Lusitanum,
 presbyterum Societatis IESV.

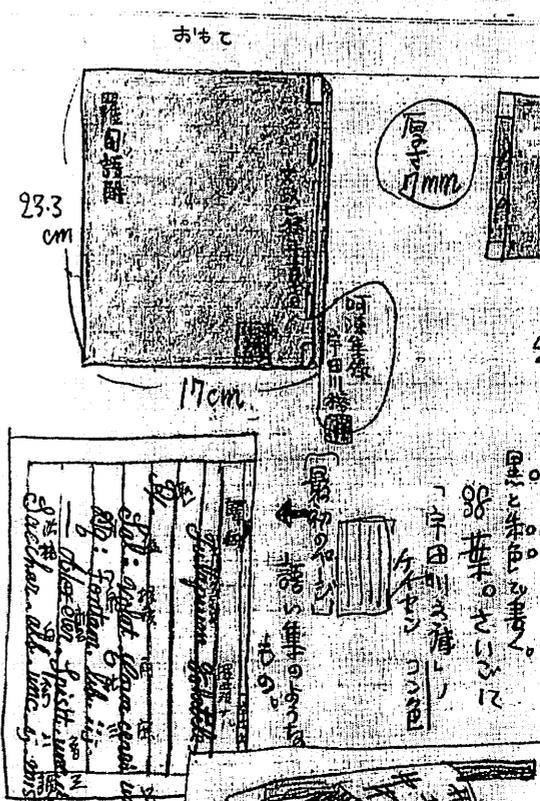


Cum facultate Ordinarij, & Superiorum

NANGASAVIJ.

In Collegio Iaponico eiusdem Societatis.
 Anno Domini. MDCX.

1610年(慶長15年)に長崎のコレ
 ジオで刷った『聖教精華』の表題。



宇田川榕庵の稿本「羅甸語解」のスケッチ。
 (於 早稲田大学中央図書館)